

令和 4 年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

—令和 4 年度国庫補助事業—

令和 6 年（2024 年）3 月



茨木市教育委員会

令和 4 年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

—令和 4 年度国庫補助事業—

令和 6 年（2024 年）3 月



茨木市教育委員会

序 文

私たちの住む茨木では、北半部は老ノ坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれたベッドタウンとして過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢の中、開発に伴う埋蔵文化財の調査件数は全国的に激減しているのに対し、本市では微減の傾向をみせているにすぎません。

本書は、令和4年度に実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書です。これら一つひとつを積み重ねた調査成果が、郷土茨木の歴史遺産として広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、近隣住民の皆様にご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

令和6年3月31日

茨木市教育委員会

教育長 岡田祐一

例 言

1. 本書は、令和4年度国宝重要文化財等保存・活用事業費市内遺跡発掘調査等事業（総額5,100,362円の内、国庫2,550,000円、市費2,550,362円）として実施した個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。令和4年度として、令和4年4月1日から令和5年3月31日までの期間で発掘調査及び整理作業を実施した。ただし本書では、整理作業の都合から令和3年度として実施した令和4年1月から令和4年3月末までの発掘調査を併せて報告する。
2. 調査の実施は、本市教育委員会歴史文化財課調査管理係職員木村健明、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、正岡大実、宮西貴史があたり、阿部ともよ、川西宏実、川畑康雄がこれを補助した。
3. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、正岡が編集にあたった。
4. 遺物、図面・写真等の記録は茨木市立文化財資料館〔〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433〕にて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書で用いる座標値は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づく。なお、各挿図に表示した方位のうち、特に表記のないものは座標北を示し、M.N.と表記したものは磁北を示す。
2. 本書で用いる標高値は東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。
3. 挿図及び本文中の土色表記は、小山正忠、竹原秀雄 編著『新版 標準土色帖』（2014年版）に基づく。また、地層の粒度の記載に関しては、基本的にWentworth（1922）の区分を使用した。
4. 遺物の実測図のうち、弥生土器・土師器・石製品の断面は白抜き、須恵器は黒塗り、瓦器・瓦質土器の断面はアミカケで示した。
5. 本書における遺構、遺物の時期決定には主に以下の文献を参考とした。
森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
古代の土器研究会編 1992『古代の土器 1 都城の土器集成』真陽社
古代の土器研究会編 1993『古代の土器 2 都城の土器集成Ⅱ』真陽社
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
日本中世土器研究会編 2022『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

本文目次

序文	第1節 茨木遺跡	5
例言・凡例	第2節 春日遺跡・中穂積遺跡・郡遺跡	11
目次	第3節 牟礼遺跡・溝咋遺跡	16
第1章 地理・歴史的環境	第4節 中条小学校遺跡・東奈良遺跡	21
第1節 地理的環境	第5節 沢良宜城跡・西方浄土寺跡・常楽寺跡	28
第2節 歴史的環境	第6節 安威城跡・その他	32
第2章 令和4年度調査地一覧	写真図版	
第3章 調査の成果	抄録・奥付	

挿図目次

図1 茨木市地質図	1	図19 平・断面図・出土遺物（溝咋遺跡2022-1）	19
図2 令和4年度発掘調査地位置図	4	図20 平・断面図・出土遺物（溝咋遺跡2022-2）	20
図3 茨木遺跡調査地位置図（1）	5	図21 中条小学校遺跡調査地位置図	21
図4 茨木遺跡調査地位置図（2）	5	図22 中条小学校遺跡・東奈良遺跡調査地位置図	21
図5 平・断面図・出土遺物（茨木遺跡2021-9）	6	図23 調査区平面図（中条小学校遺跡2022-1）	22
図6 平・断面図（茨木遺跡2022-1）	7	図24 調査区東断面図（中条小学校遺跡2022-1）	23
図7 平・断面図（茨木遺跡2022-2）	8	図25 平・断面図（中条小学校遺跡2022-2）	25
図8 平・断面図（茨木遺跡2022-3）	8	図26 平・断面図（中条小学校遺跡2022-3）	26
図9 平・断面図（茨木遺跡2022-4）	9	図27 平・断面図・出土遺物（東奈良遺跡2022-2）	27
図10 平・断面図・出土遺物（茨木遺跡2022-5）	10	図28 沢良宜城跡・西方浄土寺跡調査地位置図	28
図11 春日遺跡・中穂積遺跡・郡遺跡調査地位置図	11	図29 平・断面図（沢良宜城跡2021-2）	29
図12 調査区配置図（春日遺跡2021-5）	12	図30 平・断面図（西方浄土寺跡2022-1）	30
図13 平・断面図・出土遺物（春日遺跡2021-5）	12	図31 常楽寺跡調査地位置図	31
図14 平・断面図・出土遺物（中穂積遺跡2022-1）	14	図32 平・断面図（常楽寺跡2022-1）	31
図15 平・断面図・出土遺物（郡遺跡2022-1）	15	図33 安威城跡調査地位置図	32
図16 牟礼遺跡・溝咋遺跡調査地位置図	16	図34 平・断面図・出土遺物（安威城跡2021-2）	33
図17 調査区配置図（牟礼遺跡2021-2）	17	図35 調査地位置図	34
図18 平・断面図・出土遺物（牟礼遺跡2021-2）	17	図36 平・断面図（包蔵地外試掘）	34

写真図版目次

図版1 茨木遺跡	図版7 中条小学校遺跡
図版2 茨木遺跡	図版8 中条小学校遺跡
図版3 茨木遺跡	図版9 中条小学校遺跡
図版4 春日遺跡	図版10 東奈良遺跡・沢良宜城跡
図版5 中穂積遺跡	図版11 西方浄土寺跡・常楽寺跡
図版6 牟礼遺跡・溝咋遺跡	図版12 安威城跡・包蔵地外

第1章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、南北 17.05km、東西 10.07kmと南北に長く、東西に短い形で市域を形成しており、北は京都府亀岡市、東は高槻市、南は摂津市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町に接している。市域は、北東―南西方向に走る有馬―高槻構造線によって、大きく南北二つに区分される。北半部はおおむね標高 300m 前後の秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。南半部は、西側に標高 50～100m 前後の前期洪積層の隆起地形の一つである大阪層群で形成された千里丘陵が南北に伸び、東側に北摂山地を源とする安威川・佐保川・茨木川等によって形成された沖積層からなる三島平野が広がっている。

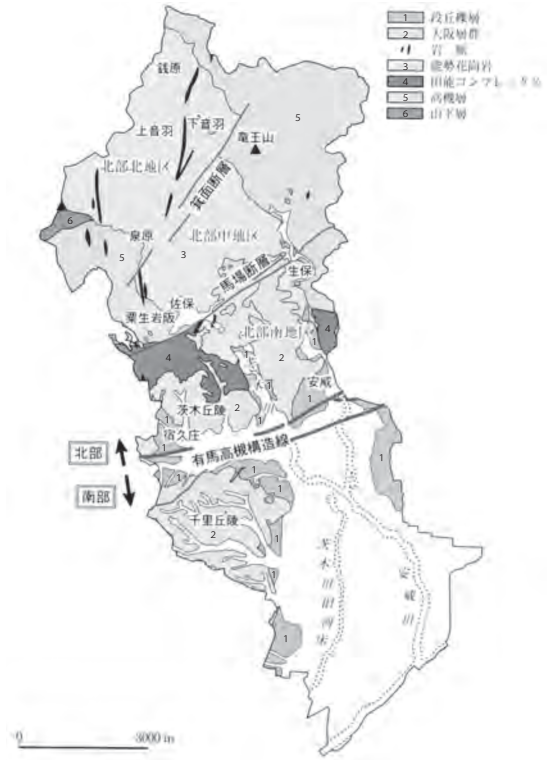


図1 茨木市地質図 (木庭 2012)

第2節 歴史的環境

ここでは、茨木市域における遺跡の分布やその内容を中心に、各時代の概要を時代順に述べておく。

旧石器時代 周辺地域に比べて希薄ではあるものの、太田遺跡から国府型ナイフ形石器や剥片類が採集されているほか、宿久庄遺跡や郡遺跡、佐保川流域ではナイフ形石器や尖頭器等が確認されている。

縄文時代 中期～後期にかけて、千提寺南遺跡や西福井遺跡、初田遺跡等の山地から丘陵部に立地する遺跡において遺構や遺物が認められている。晩期には遺跡数が増加し、耳原遺跡や五日市東遺跡、総持寺遺跡等の段丘ないし段丘縁辺部上のほか、牟礼遺跡や東奈良遺跡等の沖積平野上においても遺跡が出現するようになる。なお、耳原遺跡からは土器棺墓 16 基からなる墓域がみつまっている。

弥生時代 弥生時代になると遺跡数の増加が顕著になる。前期には東奈良遺跡、耳原遺跡、牟礼遺跡等の縄文晩期から続く遺跡のほかにも目垣遺跡、郡遺跡、倍賀遺跡等に集落が形成される。なかでも、東奈良遺跡は環濠を幾重にもめぐらせた集落を形成しており、質・量ともに極めて豊富な遺構・遺物が確認される等、弥生時代を通じて突出した内容を示す遺跡である。なお、東奈良遺跡からは国の重要文化財に指定されている石製銅鐸鑄型、銅戈・ガラス製品の鑄型、送風管等の中期の鑄造関連遺物が出土しており、集落内に高い鑄造技術をもった集団が存在していたものと推測される。中期の遺跡は、主要河川の両岸や丘陵部にまで広がり、中条小学校遺跡や中河原遺跡、太田遺跡、溝咋遺跡、春日遺跡等が出現する。後期には宿久庄遺跡、安威遺跡、総持寺遺跡等においても集落が展開する。

古墳時代 古墳時代に入ると、市域各所で様々な古墳が築造されるようになる。前期には、紫金山古墳・将軍山古墳が相次いで築造される。ともに後円部に竪穴式石室を持つ全長 100m を超す前方後円

墳である。中期になると、三島地域最大である太田茶臼山古墳が造営される。全長 226 m、後円部径 138m の前方後円墳であり、現在は宮内庁により「三嶋藍野陵」として治定されている。後期には山麓部から丘陵部を中心に、横穴式石室を主体とする青松塚古墳、南塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳等の単独墳が築造される一方で、安威古墳群、将軍山古墳群、新屋古墳群等の群集墳が認められる。また、丘陵部から沖積平野部を中心とした太田遺跡、総持寺遺跡、中条小学校遺跡、郡遺跡等の遺跡において埋没古墳群の存在が明らかとなっている。このほか、古墳時代の集落遺跡としては、東奈良遺跡、中条小学校遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡、郡遺跡、安威遺跡、総持寺遺跡等が代表的な遺跡として挙げられる。安威遺跡からは朝鮮半島南部由来の遺物・遺構が多く出土しており、本市域における古墳時代集落の動態を考える上で極めて重要である。

古代 奈良時代に入ると、茨木市域は摂津国島下郡に編成される。平城遷都にともない、島下郡には「殖村駅」が置かれ、茨木市域は宮都から難波や山陽・西海道諸国への公的な通路となる。7世紀後半ごろには太田廃寺・穂積廃寺・三宅廃寺等の寺院が建立され、太田廃寺からは、塔心礎とその内部に納められた舍利容器一具等が発見された。9世紀以降においても、総持寺や忍頂寺をはじめとする寺院が市域各地に建立される。また、いわゆる延喜式神名帳には島下郡に 13 社もの神社が規定されており、そのうち 10 社が現在の茨木市域に所在した。都から大宰府へと向かう山陽道、難波方面へと向かう三島路が交わる地点にある茨木市域は、政治・文化・交通の要所であったといえる。

中世～近世 中世の遺跡としては、郡遺跡、東奈良遺跡、宿久庄遺跡、玉櫛遺跡、真砂遺跡等の集落遺跡が代表的な遺跡として挙げられる。一方、中世から近世初頭の遺跡には、茨木城、三宅城、福井城、泉原城、佐保砦などの城館跡がある。市域中心部に位置する茨木城は、城主の変遷によりその内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城や廃城後の近世在郷町の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも発掘調査によって得られる知見は、その解明に向けてとりわけ重要である。このほか、国史跡に指定されている西国街道沿いに位置する郡山宿本陣は「椿の本陣」とも呼ばれ、江戸時代には西国大名たちの参勤交代にも利用された。また、市域北部の集落である千提寺・下音羽は、「聖フランシスコ・ザビエル像」をはじめとするキリシタン遺物がまとまって発見された地として著名であり、高山右近の所領の時期にキリシタン信仰がもたらされたと考えられている。禁教令下の江戸時代を通じて密かに受け継がれてきたため、その存在が明らかになるのは 20 世紀に入ってからである。本市で継続的に調査を進めてきた千提寺菱ヶ谷遺跡や新名神高速道路建設工事に伴う一連の発掘調査およびキリシタン遺物等の研究成果をもとに、この地のキリシタン信仰への理解がさらに進むことが期待される。

〔引用文献〕

木庭元晴 2012 「基盤地質」『新修茨木市史』 第一巻通史 I 茨木市

〔参考文献〕

茨木市史編さん委員会 2012 『新修 茨木市史』 第一巻通史 I 茨木市

茨木市史編さん委員会 2014 『新修 茨木市史』 第七巻史料編考古 茨木市

茨木市教育委員会 1998 『茨木の史跡』

茨木市教育委員会 2005 『郡遺跡発掘調査概要報告書』

公益財団法人大阪府文化財センター 2015 『千提寺西遺跡 日奈戸遺跡 千提寺市阪遺跡 千提寺クルス山遺跡』

第2章 令和4年度調査地一覧

※a～eは、令和4年1月～3月（令和3年度）に実施したものである。

No.	遺跡名	調査地	調査期間	面積	担当者	内容
a	春日遺跡2021-5	春日三丁目	2022/1/6	6㎡	木村	溝1条・土坑1基を検出。土師器・須恵器・瓦器片が出土。
b	牟礼遺跡2021-2	園田町	2022/1/11	3.6㎡	富田	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器片が出土。
c	安威城跡2021-2	安威二丁目	2022/1/31 ～ 2022/2/1	10㎡	木村	土師器・須恵器片が出土。
d	茨木遺跡2021-9	上泉町	2022/3/7	5㎡	木村	溝1条を検出。土師器・瓦器片が出土。
e	沢良宜城跡2021-2	美沢町	2022/3/17 ～ 2022/3/18	10㎡	木村	遺構・遺物なし。
1	中穂積遺跡2022-1	中穂積一丁目	2022/4/5	6㎡	木村	ピット5基を検出。土師器片が出土。
2	茨木遺跡2022-1	片桐町	2022/4/11	5㎡	木村	遺構・遺物なし。
3	中条小学校遺跡2022-2	新中条町	2022/4/14	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
4	中条小学校遺跡2022-3	下中条町	2022/4/21	6㎡	木村	溝1条・ピット2基を検出。土師器・瓦・陶磁器片が出土。
5	郡遺跡2022-1	上穂積二丁目	2022/6/28	6㎡	木村	ピット1基を検出。弥生土器・土師器片が出土。
6	常楽寺跡2022-1	蔵垣内三丁目	2022/8/5	6㎡	木村	磁器片が出土。
7	西方浄土寺跡2022-1	真砂一丁目	2022/8/15	6㎡	木村	土師器片が出土。
8	溝咋遺跡2022-1	五十鈴町	2022/8/22	6㎡	木村	土師器・須恵器・瓦器片が出土。
9	茨木遺跡2022-2	片桐町	2022/9/2	1.69㎡	富田	弥生土器片が出土。
10	包蔵地外	玉櫛二丁目	2022/10/11	6㎡	富田	遺構・遺物なし。
11	茨木遺跡2022-3	新庄町	2022/10/18	6.25㎡	富田	遺構・遺物なし。
12	中条小学校遺跡2022-1	駅前三丁目	2022/12/07 ～ 2023/02/08	約510㎡	木村	井戸6基・溝38条をはじめ多数の遺構を検出。弥生土器・土師器が出土。
13	東奈良遺跡2022-2	東奈良二丁目	2022/12/15	9㎡	富田	土師器・須恵器片が出土。
14	茨木遺跡2022-4	上泉町	2022/12/16	5㎡	富田	遺構・遺物なし。
15	茨木遺跡2022-5	片桐町	2023/2/20	6㎡	富田	溝1条を検出。土師器・瓦器片が出土。
16	溝咋遺跡2022-2	五十鈴町	2023/3/2	6㎡	富田	土師器・瓦器片が出土。

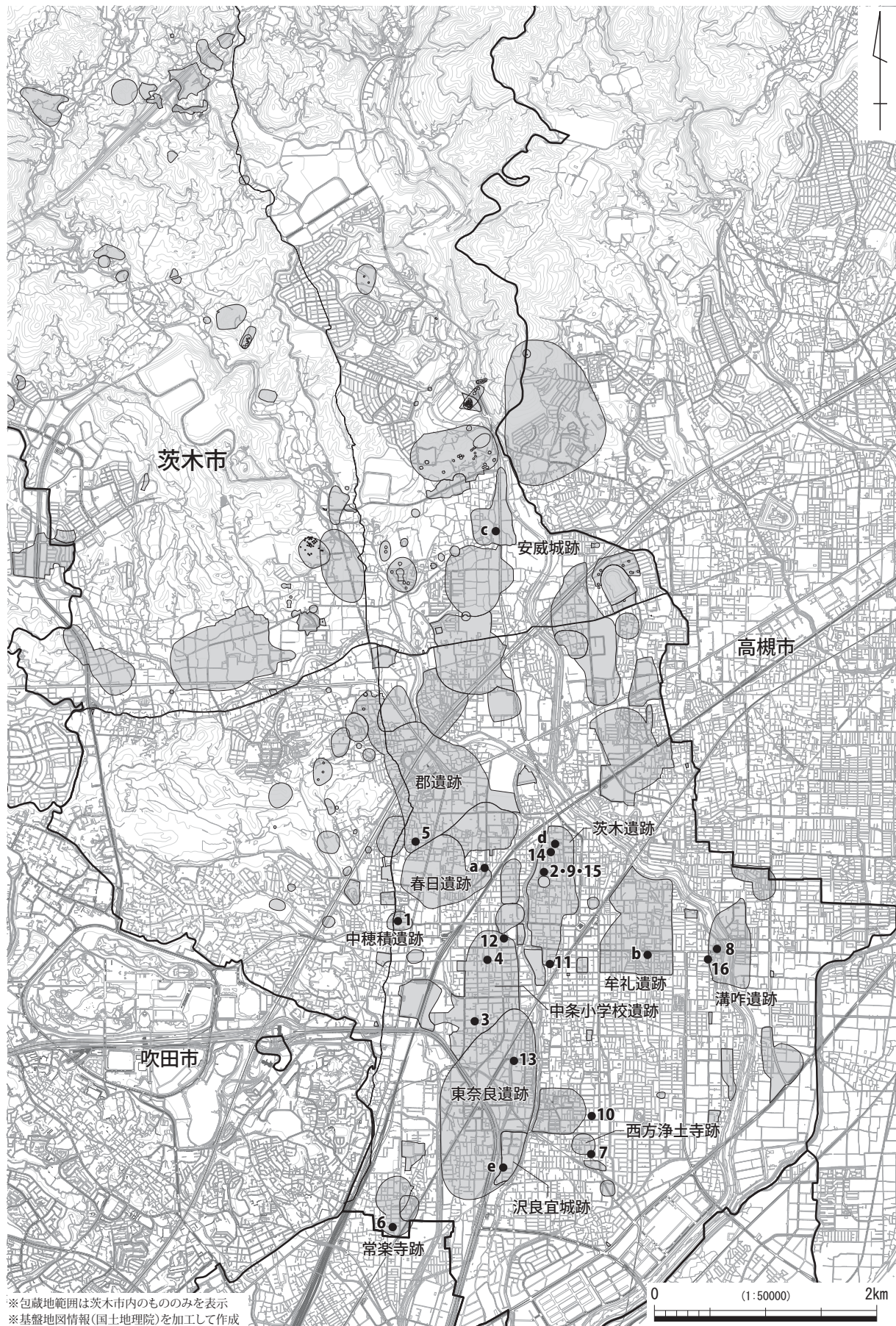


図2 令和4年度発掘調査地位置図 (アルファベット・アラビア数字は前頁No. と対応する)

第3章 調査の成果

第1節 茨木遺跡

1. 茨木遺跡 2021-9 (図3・5 図版1)

調査地 上泉町29番5、29番36、29番37の一部 | 調査面積 5㎡
調査期間 令和4年3月7日 | 調査担当 木村健明

はじめに 上泉町において計画された個人住宅の建築に伴い、計画地内に2×2.5mの調査区を設定して調査を行った。計画地内の現況地盤面は南接する東西道路面とほぼ同じである。

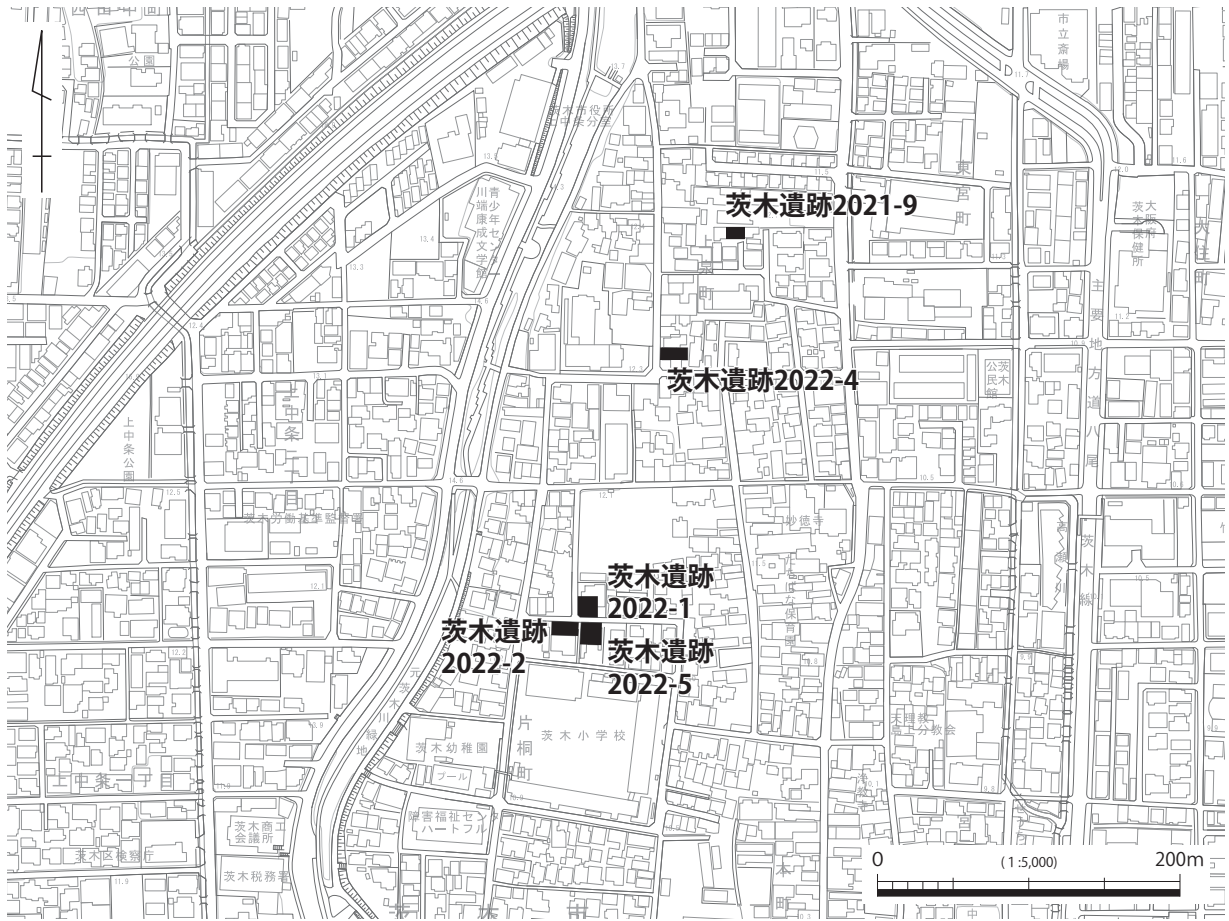


図3 茨木遺跡調査地位置図(1)



図4 茨木遺跡調査地位置図(2)

第3章 調査の成果

基本層序 調査地の基本層序は大別4層、細別8層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・近～現代耕作土層（0-1a～0-3a層）、1層：中世の遺物を含む耕作土層（1-1a層）、2層：中世以前に堆積したとみられる水成層（2-1b～2-3b層）、3層：粗粒の堆積物で構成される水成層（3-1b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査では、層界が明瞭に認められる0層（0-3a層）下面について平面的な調査を実施し、南北方向の溝を1条検出した。1溝の埋土は0-3a層とは異なる起源不明の粗砂を主体としていることから、基底面遺構として捉えることができる。溝の埋土中からは、遺物は出土していない。

遺物は1-1a層から中世の土器が細片を中心に少量出土している。このうち図示可能なものを図5に掲げた（1・2）。1は土師器皿、2は瓦器碗である。いずれも細片のため詳細な帰属時期は不明だが、内外面のヘラミガキの様相等を勘案すると、2は楠葉型Ⅱ～Ⅲ期に帰属するとみられ、12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。出土量が少なく、破片を主体とするため詳細は決し難いが、当該層準に含まれる遺物は概ね12世紀後半～13世紀前半に帰属するものと判断できる。

まとめ 本調査区では中世の土器を包含する層準を確認することができ、それよりも後出する溝1条を検出した。遺構の帰属時期は明らかにし得なかったが、地層の確認に加え細片ながらも遺物が出土したことで、各地層の時期比定に関して新たな知見を加えることができた点で重要な成果を得ることができたものと言える。

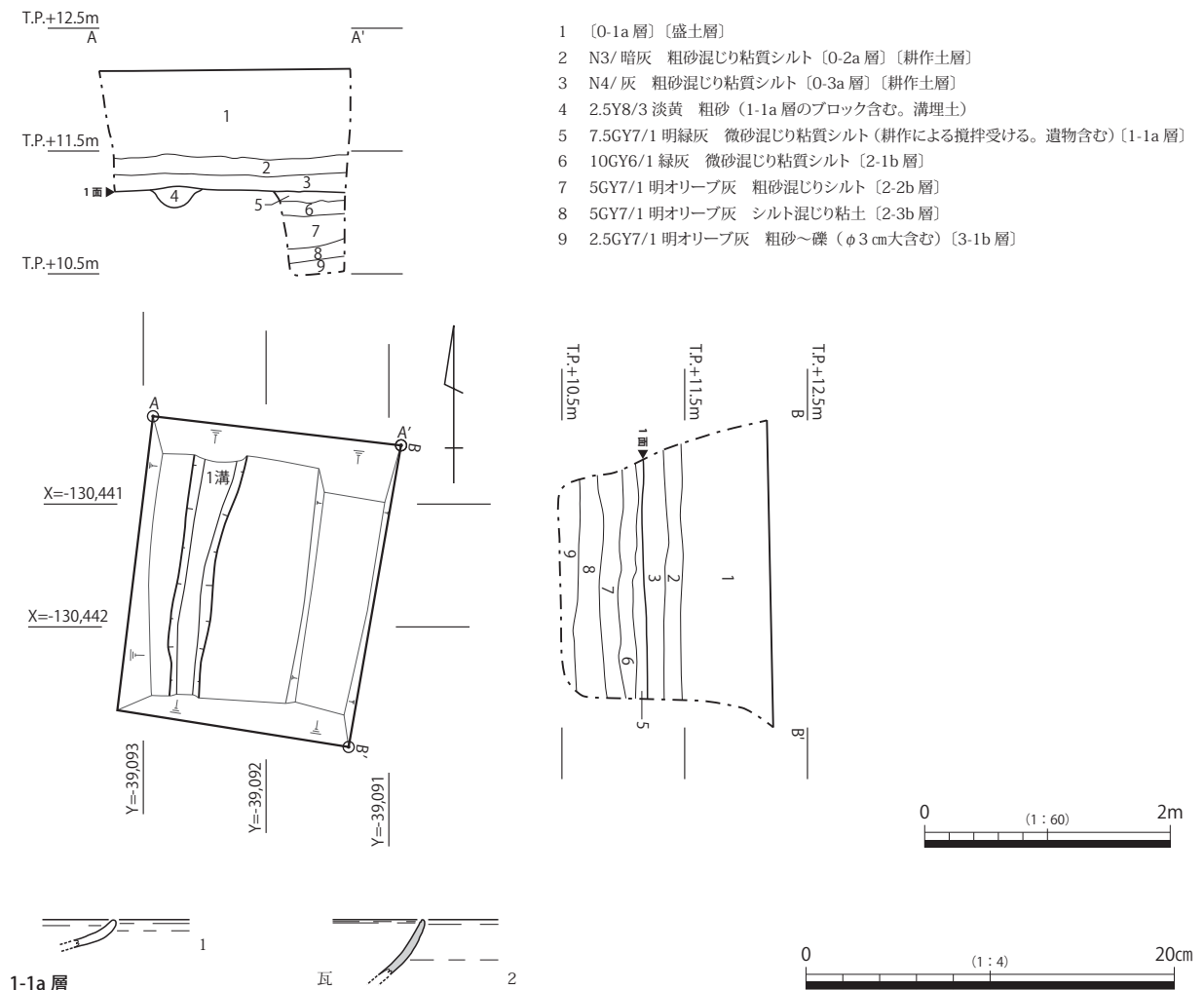


図5 平・断面図・出土遺物（茨木遺跡 2021-9）

2. 茨木遺跡 2022-1 (図3・6 図版1)

調査地 片桐町1121番3

調査面積 5m²

調査期間 令和4年4月11日

調査担当 木村健明

はじめに 片桐町において計画された個人住宅の建築に伴い、計画地内に2×2.5mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西及び南に接する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は4層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a層)、1層：時期不明の黄灰色粗砂混じり粘質シルトからなる耕作土層と目される層準(1-1a層)、2層：時期不明の褐灰色粘土から構成される耕作土層ないし土壌層と目される層準(2-1a層)、3層：時期不明の明オリープ灰色の粘土から構成される水成層(3-1b層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査では、層界の明瞭な2層(2-1a層)下面において平面的な精査を行ったが、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

まとめ 本調査区で確認した3-1b層は、周辺の調査成果を加味すると遺構面を形成する水成層に比定可能な層準である。今回の調査では調査面積が狭小なため、下位層の十分な観察を為し得なかった。堆積物の生成要因も含め、下位層準の様相把握は今後の課題である。

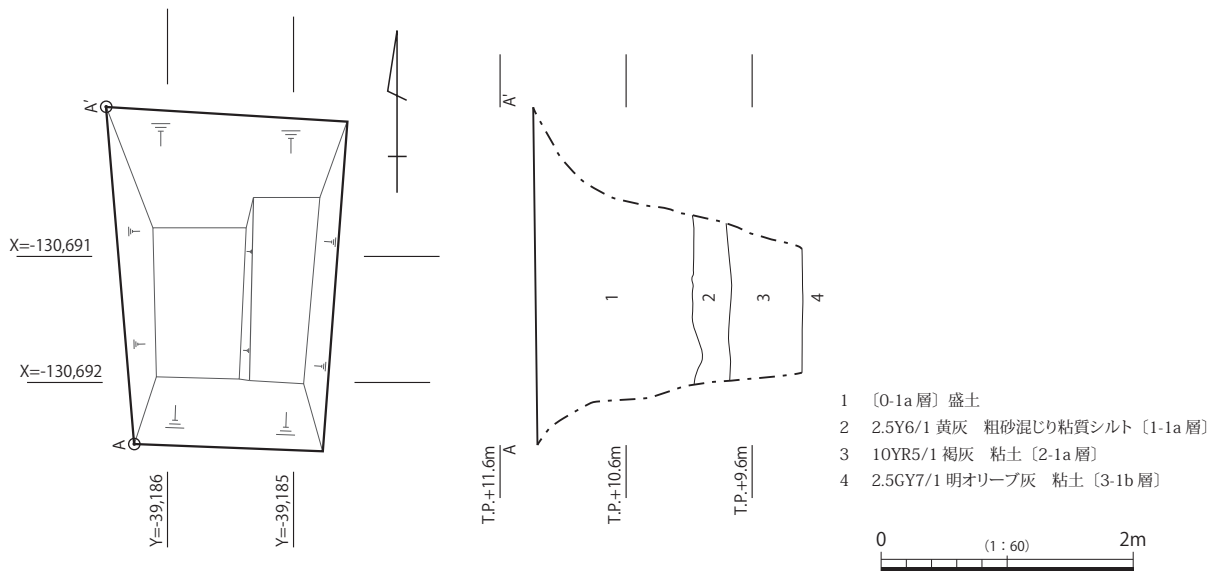


図6 平・断面図(茨木遺跡 2022-1)

3. 茨木遺跡 2022-2 (図3・7 図版2)

調査地 片桐町1121番12

調査面積 1.69m²

調査期間 令和4年9月2日

調査担当 富田卓見

はじめに 片桐町において計画された個人住宅の建築に伴い、1.3×1.3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は北接する東西道路面とほぼ同じで、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別4層、細別7層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a～0-4a層)、1層：時期不明の水成層(1-1b層)、2層：時期不明の土壌層と目される層準(2-1a層)3層：時期不明の水成層(3-1b層)の順に堆積が認められた。2層は暗色味を帯びた粘性の強い層準であり、層相から土壌層と判断したが、堆積速度の緩慢な環境で形成された水成堆積物の可能性もある。

遺構・遺物 いずれの層界においても遺構は確認できなかった。

第3章 調査の成果

遺物は 2-1a 層から弥生土器とみられる土器の細片が出土した。微細な破片のため図示することができず、詳細な時期は明らかにし得なかった。

まとめ 今回の調査で確認した 2 層は、微量ながら遺物を含んでおり、層相の観察から本層準の下面において遺構が確認できる可能性もある。しかしながら、今次調査では 0 層とした現代の盛土層が厚く堆積しており、調査地も狭小であったため地層の確認以上の有意な情報を得ることはできなかった。2 層の時期比定も含む下位に位置する層準の様相把握は今後の課題である。

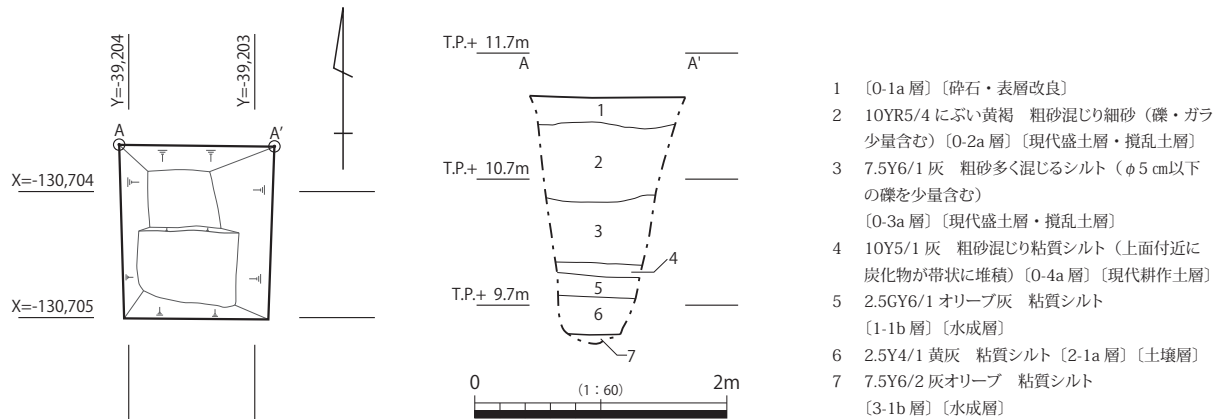


図7 平・断面図 (茨木遺跡 2022-2)

4. 茨木遺跡 2022-3 (図4・8 図版2)

調査地 新庄町740番5の一部

調査面積 6.25㎡

調査期間 令和4年10月18日

調査担当 富田卓見

はじめに 新庄町において計画された個人住宅の建築に伴い、2.5 × 2.5 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西接する南北道路面より約 0.4 mほど低く、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別 3 層、細別 8 層に区分でき、上層から 0 層：現代盛土層 (0-1a

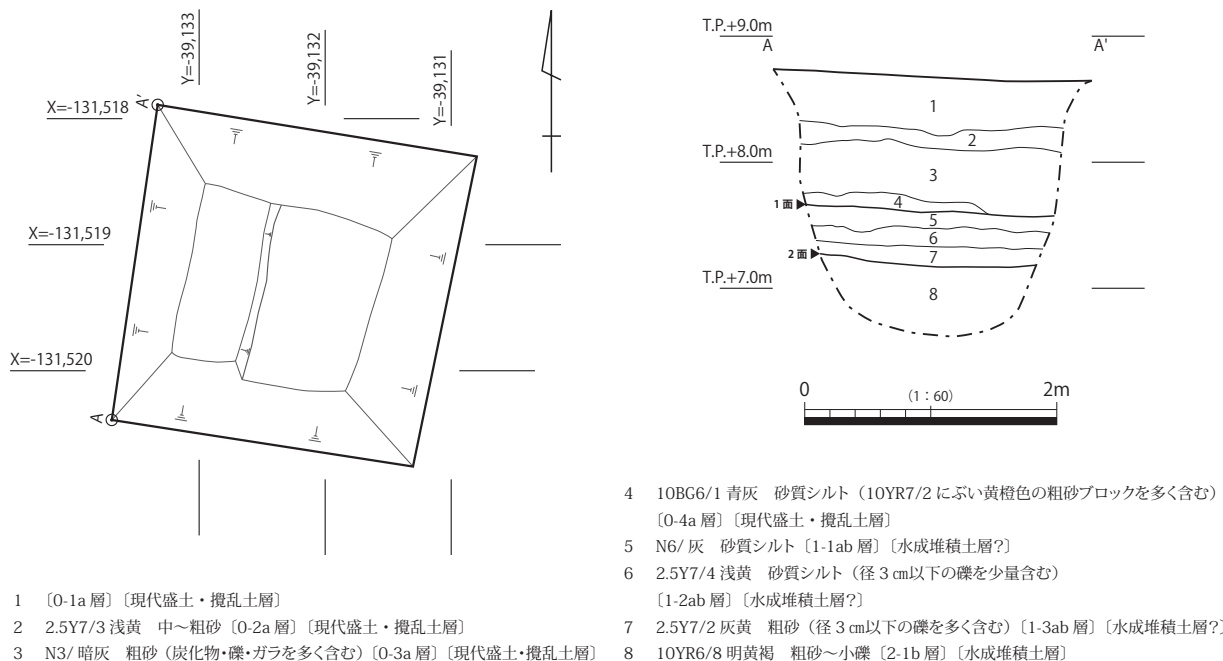


図8 平・断面図 (茨木遺跡 2022-3)

～0-4a層)、1層：時期不明の水成層ないし水成層を母材とした耕作土層と目される層準(1-1ab・1-2ab層)、2層：時期不明の水成層(2-1a層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 層界の明瞭な0層(0-4a層)下面、及び1層(1-3a層)下面において、遺構の検出を期して平面的な精査を実施したが、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

まとめ 本調査区で確認した2層は、大振りな斜行葉理が顕著に認められる粗砂～細礫程度の粒径の粗い砂礫で構成される層準である。周辺の調査成果から推測すると、当該砂礫は流路充填堆積物の可能性があるが、調査区が狭小なため詳細を明らかにすることはできなかった。当該層準の形成時期及び性格については調査成果の追加を俟って慎重に判断する必要がある。

5. 茨木遺跡 2022-4 (図3・9 図版2)

調査地 上泉町1186番1

調査面積 5㎡

調査期間 令和4年12月16日

調査担当 富田卓見

はじめに 上泉町において計画された個人住宅の建築に伴い、計画地に2×2.5mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じで、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別3層、細別7層に区分でき、上層から0層：現代盛土層(0-1a～0-4a層)、1層：中世に形成された可能性のある耕作土層(1-1a・1-2a層)、2層：時期不明の水成層(2-1b層)の順に堆積が認められた。2層は、淘汰の良い細砂を基調とする水成層であり、河川性の氾濫堆積物とみられる。

遺構・遺物 層界の明瞭な0層(0-4a層)下面において遺構の検出を期して平面的な精査を実施したが、いずれの層界及び層準からも遺構・遺物は確認できなかった。

まとめ 今回の調査で確認した1層以下の各層準は、いずれも河川性の氾濫堆積物とみられる。今回は本層準が厚く、調査地も狭小であったため下位層の確認は成し得なかった。下位に位置する層準の様相把握は今後の課題である。

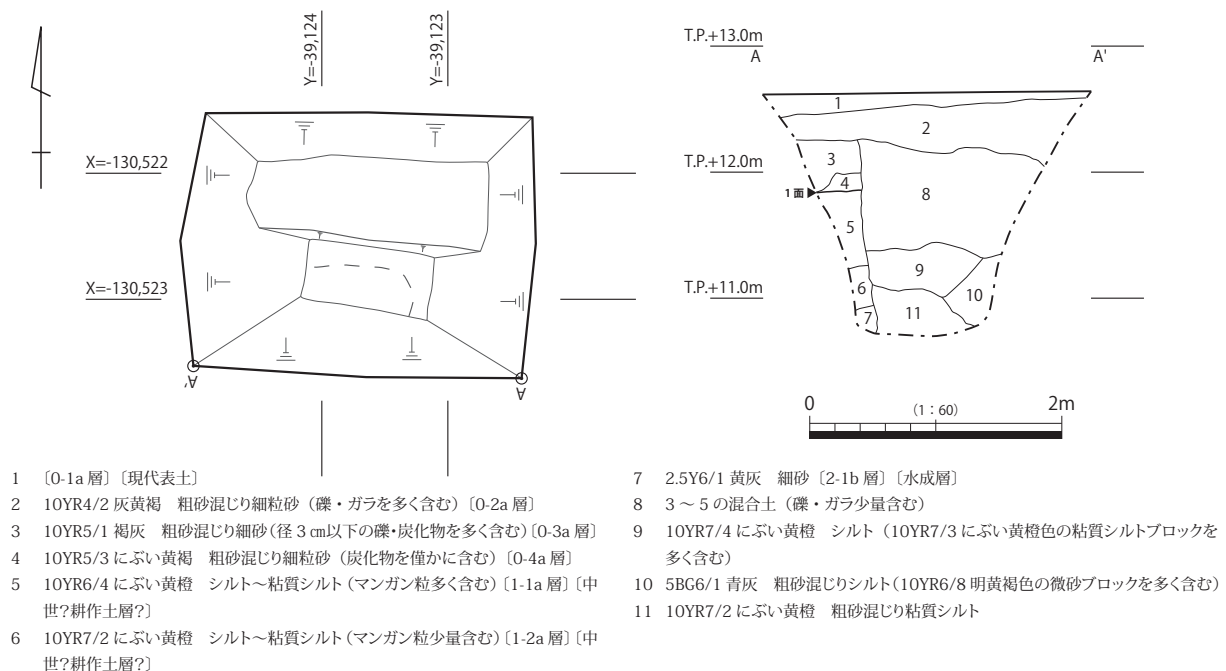


図9 平・断面図 (茨木遺跡 2022-4)

6. 茨木遺跡 2022-5 (図3・10 図版3)

調査地 片桐町1122番1の一部

調査面積 6㎡

調査期間 令和5年2月20日

調査担当 富田卓見

はじめに 片桐町において計画された個人住宅の建築に伴い、計画地に2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は北面する東西道路面とほぼ同じで、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別7層、細別12層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代耕作土層(0-1a・0-2a層)、1層：近世の耕作土層(1-1a・1-2a層)、2層：中世の耕作土層(2-1a～2-3a層)、3層：中世以前の耕作土層(3-1a層)、4層：中世以前の耕作土層(4-1a・4-2a層)、5層：時期不明の水成層(5-1b層)、6層：時期不明の土壌層(6-1a層)の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 3層(3-1a層)下面において平面的な精査を実施したところ、南北方向の溝を1条検出した。1溝は検出面からの深さ約5cmを測り、3層に近似した埋土で充填される下面遺構である。

遺物は2・3層から瓦器碗や土師器細片が出土した。このうち、図示可能なものを図10に掲げた(3)。3は瓦器碗の底部片である。残存率が低い上に器表面の磨滅が著しく帰属時期の詳細は不明だが、高台の断面形状から概ね12世紀台の所産とみられる。

まとめ 3層下面で遺構を確認し、遺跡の様相把握にあたり重要な知見を加えることができた。なお、最下部で確認した6層は暗色味が強い土壌層であり、層相から推測すると古相を示す可能性が高い。当該層準の生成要因及び時期比定は、周辺における調査成果の追加を俟って慎重に検討を加えたい。

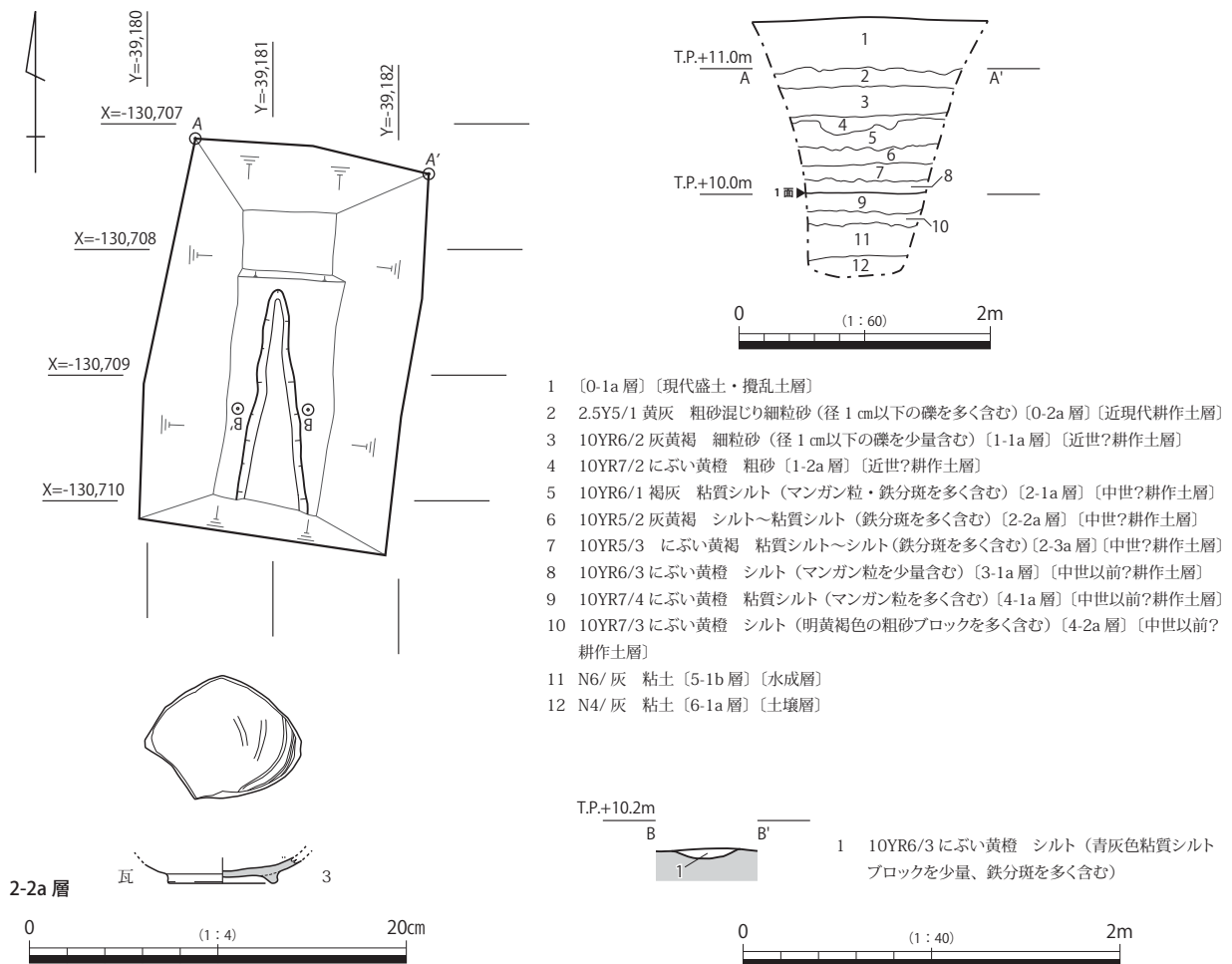


図10 平・断面図・出土遺物(茨木遺跡 2022-5)

第2節 春日遺跡・中穂積遺跡・郡遺跡

1. 春日遺跡 2021-5 (図 11～13 図版 4)

調査地 春日三丁目249番7の一部、248番9

調査面積 6㎡

調査期間 令和4年1月6日

調査担当 木村健明

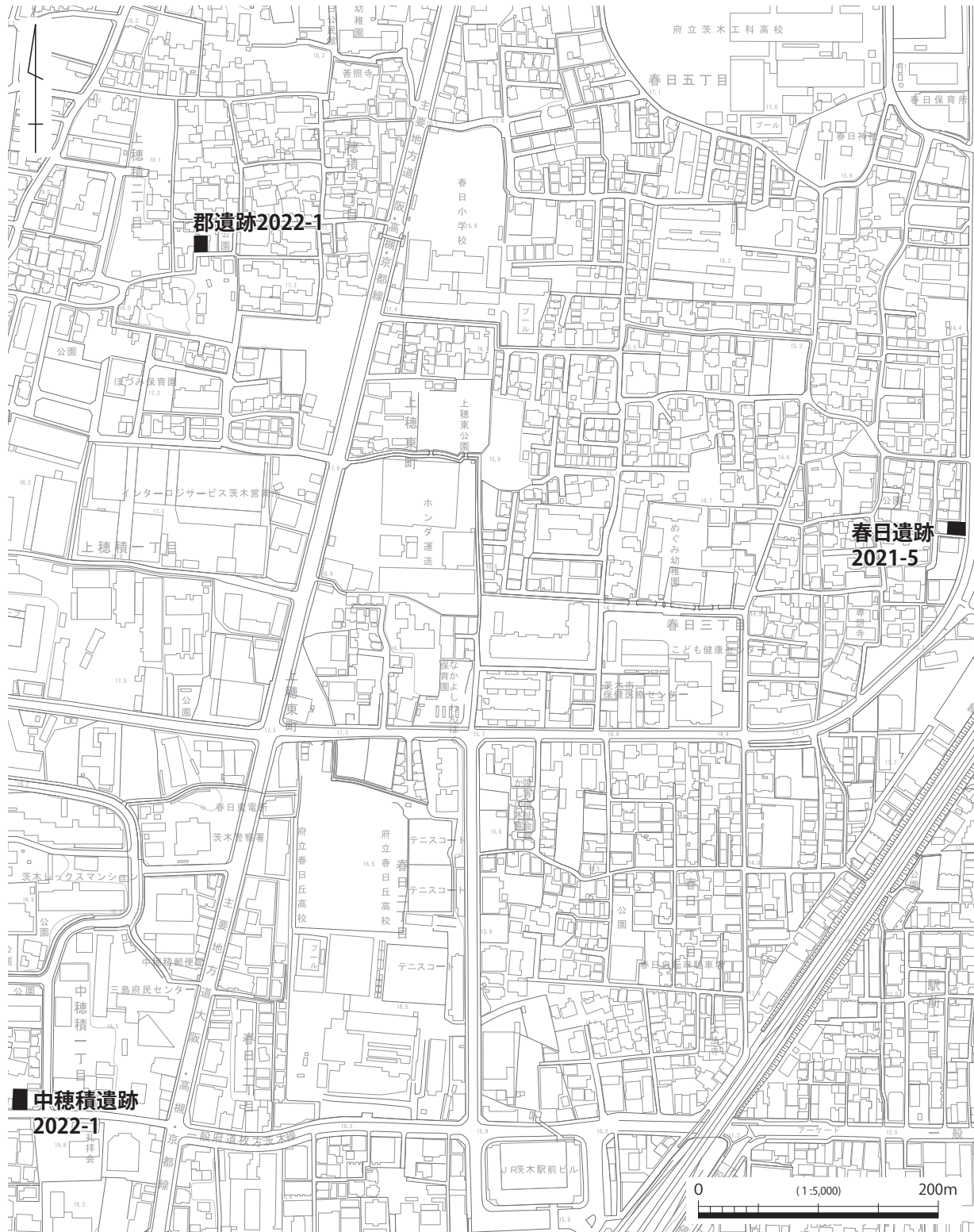


図 11 春日遺跡・中穂積遺跡・郡遺跡調査地位置図

第3章 調査の成果

はじめに 春日三丁目において計画された兼用住宅の建築に伴い、計画地に2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は4層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：近～現代耕作土層（1-1a層）、2層：中～近世に形成されたと目される耕作土層（2-1a層）、3層：ベース層を構成する堅緻な水成層ないし沖積段丘構成層（3-1b・3-2b層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査の結果、2層（2-1a層）下面において溝1条、土坑1基を検出した。2溝は調査区の北東隅で部分的に検出した。大部分が調査区外に位置するため、平面形状及び規模

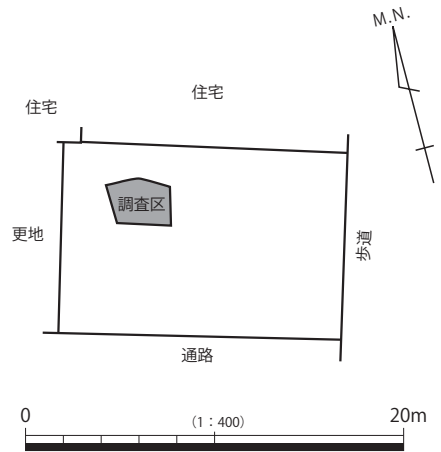
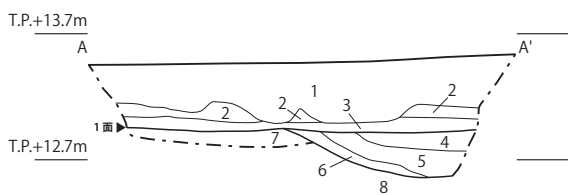
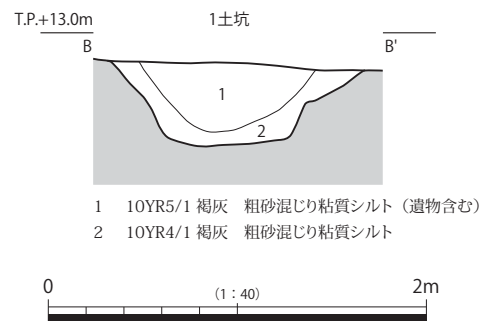
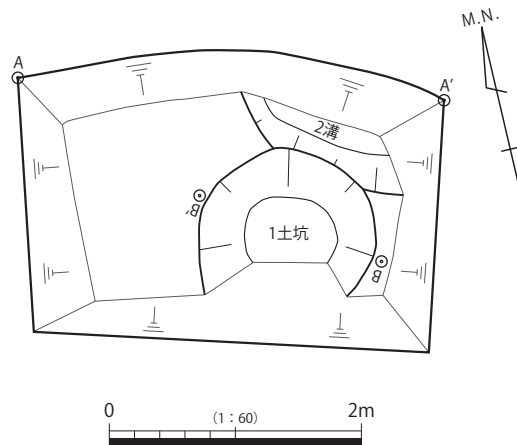


図12 調査区配置図（春日遺跡 2021-5）



- 1 [0-1a層]〔盛土層〕
- 2 N6/灰 粘質シルト〔1-1a層〕〔耕作土層〕
- 3 2.5Y6/1 黄灰 粘質シルト〔2-1a層〕〔耕作土層〕
- 4 10YR5/1 褐灰 粗砂混じり粘質シルト〔2溝〕
- 5 10YR4/1 褐灰 粗砂混じり粘土〔2溝〕
- 6 7.5YR4/1 褐灰 粗砂混じり粘質シルト〔2溝〕
- 7 10YR7/6 明黄褐 粘土〔3-1b層〕
- 8 2.5Y7/4 浅黄 砂礫（1土坑・2溝の底で露出する）〔3-2b層〕



- 1 10YR5/1 褐灰 粗砂混じり粘質シルト（遺物含む）
- 2 10YR4/1 褐灰 粗砂混じり粘質シルト

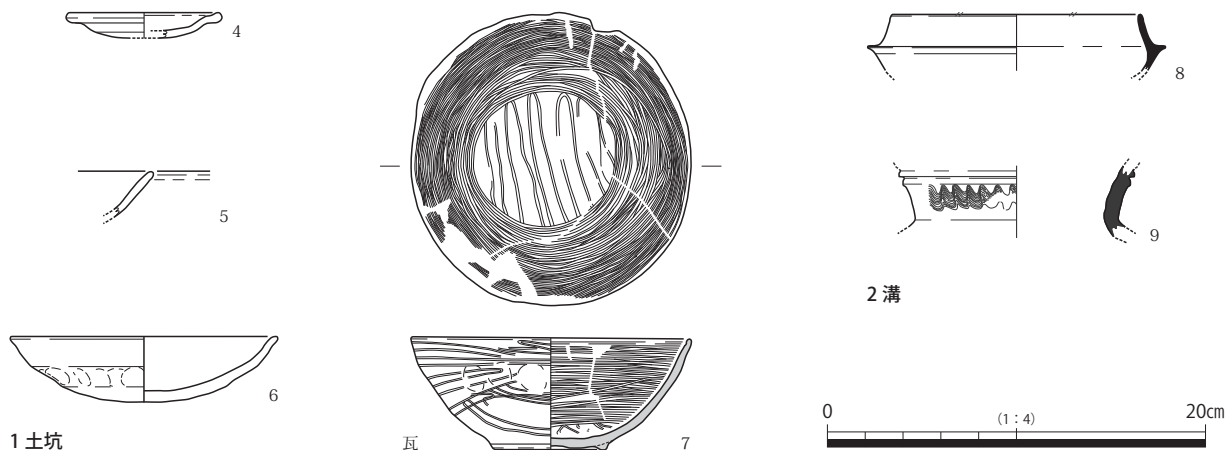


図13 平・断面図・出土遺物（春日遺跡 2021-5）

は不明だが、検出面からの深さ 35cm以上の深いもので、暗色味の強い土壌を埋土とする。1 土坑は 2 溝に重複しており、直径約 1.4 m、検出面からの深さ 45cmを測るやや大振りな土坑である。掘方の断面形状は逆台形を呈し、埋土は 2 溝のものと比較するとやや淡い色調の埋土で充填されている。いずれの遺構の埋土も起源は不明であることから、基底面遺構として捉えるべき遺構と考えられる。

遺物は 1 土坑から土師器・瓦器・須恵器、2 溝から土師器・須恵器がそれぞれ出土し、図示可能なものを図 13 に掲げた (4～9)。4～6 は土師器である。4 はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿で、復元口径 7.8cm、残存高 1.35cmを測り、器壁の厚みは 3mm前後と全体的にやや厚手のつくりである。胎土の色調は灰白色を呈する。5 は土師器皿ないし杯の口縁部片である。残存高 2.45cmを測る。胎土は、全体的ににぶい橙～浅黄橙と赤色系統の色調を呈する。6 は赤色系の皿ないし杯である。口径 14.0cm、器高 3.45cmを測る。出土点数が限られるため詳細は決し難いが、概ね京 V 期新～京 VI 期古に帰属し、11 世紀後葉～12 世紀前葉の所産とみることができる。7 はほぼ完形の瓦器椀。口径 14.8cm、器高 6 cmを測る。高台はやや低平な逆台形のものを取り付け、緩く内湾する体部から直線的に立ち上がる口縁部へ至り、口縁端部内面には沈線が一条施される。体部外面には 5 分割のヘラミガキが施され、内面には極めて密な圏線ミガキ、見込み部にはジグザグ状の暗文を施す。楠葉型瓦器椀の I-2～3 期に帰属するものとみられる。11 世紀後葉～12 世紀前葉の所産。これら 1 土坑から出土した遺物は、いずれも 11 世紀後葉～12 世紀前葉の所産とみられることから、1 土坑の時期もこれに求められよう。8・9 は 2 溝から出土した須恵器である。8 は須恵器杯身。細片のため口径の復元に不安を残すが、復元口径 13.1cmを測る。MT15～TK10 型式に属するものとみられる。9 は須恵器の壺である。杯身同様、細片のため復元径に不安を覚えるが、概ね TK23～TK47 型式に帰属するとみられる。以上のことから 2 溝の帰属時期はやや幅があるものの、5 世紀後葉～6 世紀前葉に求めることができようか。

まとめ 今回の調査では、中～近世耕作土層を除去した面において複数時期の遺構が良好に遺存することを確認した。遺構の時期は、埋土の層相や出土遺物から 1 土坑が古代末～中世、2 溝は古墳時代の遺構と考えられる。調査面積が限定的であったため、検出した遺構の性格を明らかにすることはできなかったが、本調査地点を含む一帯には、当該時期の遺構が分布していることが窺われる。今次調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である春日遺跡の縁辺部に位置しているが、限られた面積にも関わらず稠密に遺構が認められたことから、遺跡内における遺構の分布状況を検討する上で重要な成果を得ることができたものと言えよう。

2. 中穂積遺跡 2022-1 (図 11・14 図版 5)

調査地 中穂積一丁目245番1

調査面積 6m²

調査期間 令和4年4月5日

調査担当 木村健明

はじめに 中穂積一丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は南面する東西道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は、大別 3 層、細別 4 層に区分でき、上層から 0 層：現代盛土層 (0-1a 層)、1 層：中～近世に形成されたと目される耕作土層 (1-1a・1-2a 層)、2 層：ベースを形成するしまりの良い水成層ないし埋没段丘構成層 (2-1b 層) の順に堆積が認められた。なお、各層中からは遺物が認められなかったため、地層の時期は層相からの推定に留まる。

遺構・遺物 1 層 (1-2a 層) 下面においてピット 5 基を検出した。これらのピットは直径 0.15～0.35

第3章 調査の成果

mの円形を呈し、検出面からの深さは浅いもので12～26cm、深いもので約40cmを測る。遺構の埋土は、いずれも1層よりもやや暗色味を帯びた色調を呈する起源不明の土壌であることから、基底面遺構として捉えるべきものとする。なお、遺構の配置に規則性は認められなかった。

遺物は3ピット及び4ピットから土師器片が出土した。微細な破片が多く詳細な帰属時期は不明とせざるを得ないが、かろうじて図示し得たものを図14に掲げた(10)。10は3ピットから出土した土師器小皿の破片である。赤褐色の色調を呈し、緩やかに立ち上がる口縁部には一段ナデが施され、口縁端部は丸く収める。12～13世紀の所産か。

まとめ 調査では、限られた面積にも関わらず5基のピットを確認することができた。いずれの埋土も概ね近似する層相を示すことに加え、僅かではあるが中世に帰属する遺物が認められたことから、これらの遺構は中世に帰属するとみてよいと考える。今回の調査成果は断片的なものではあるが、周辺では調査事例が少なく、遺跡の様相把握にあたり重要な知見を加えることができたものといえよう。

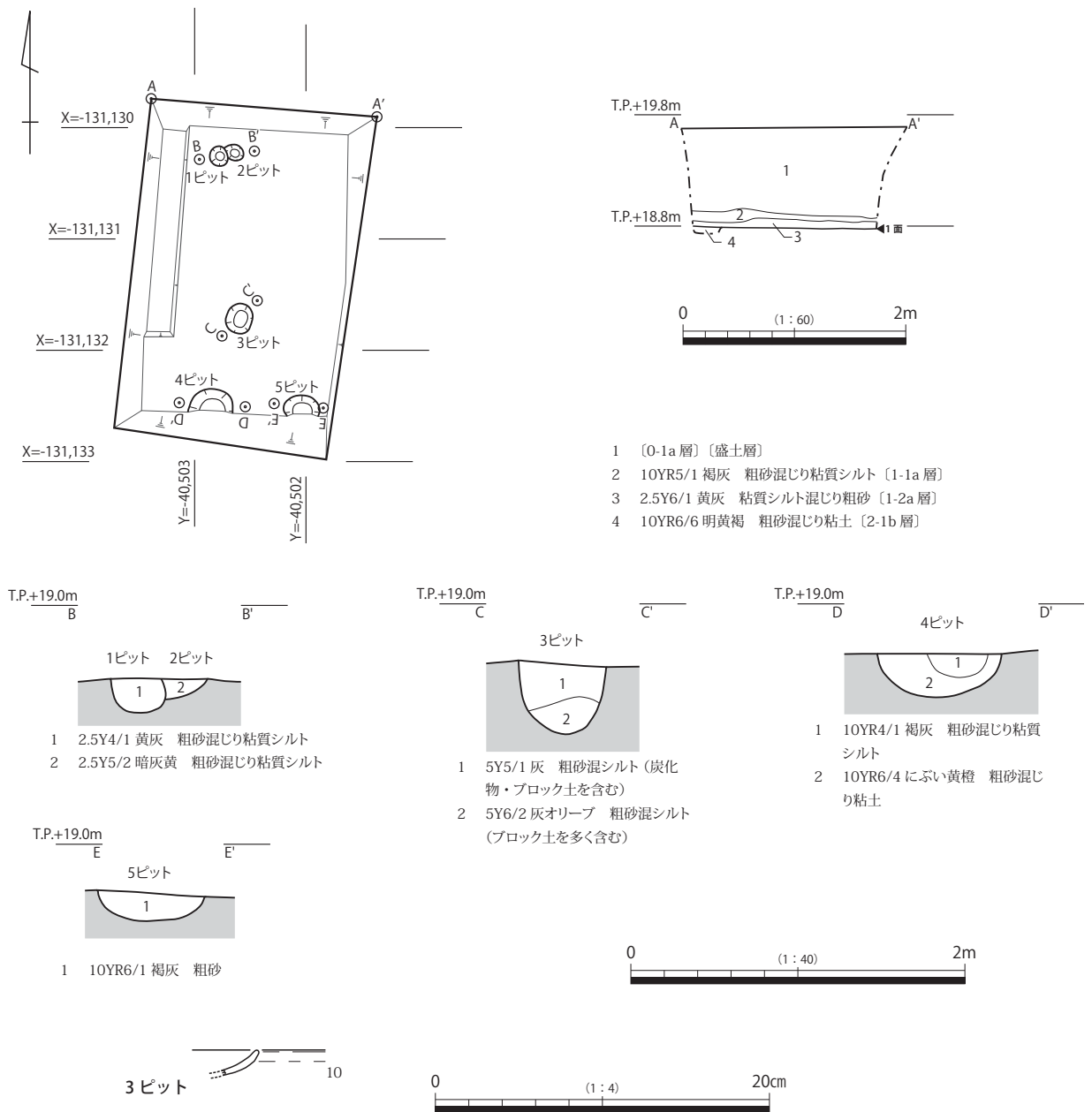


図14 平・断面図・出土遺物(中穂積遺跡 2022-1)

3. 郡遺跡 2022-1 (図 11・15)

調査地 上穂積二丁目218番4

調査面積 6m²

調査期間 令和4年6月28日

調査担当 木村健明

はじめに 上穂積二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2 × 3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は南面する東西道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は3層に区分でき、上層から0層：現代盛土層 (0-1a層)、1層：遺物を含むやや淘汰の悪い土壌層 (1-1a層)、2層：ベース層を形成する淘汰の良い水成層ないし埋没段丘構成層 (2-1b層) の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査区の大部分は現代の攪乱が及んでいたが、1層 (1-1a層) 下面においてピット1基を検出することができた。1ピットは半分以上が調査区外に延びているため全容は窺いしれないが、直径0.35 m以上、検出面からの深さは8cmを測る。遺構の埋土はやや淡い色調を呈する粗粒の堆積物であるが、1層と概ね近似した傾向にあることから、下面遺構として位置づけることができよう。

遺物は1-1a層から弥生土器の細片が複数点出土した。このうち、図示可能なものを図15に掲げている (11)。11は1-1a層から出土した弥生土器片である。広口壺の頸部片とみられ、極めて低平な指頭圧痕突帯文が付加されている。細片のため詳細は不明だが、摂津Ⅳ様式の所産とみられる。

まとめ 今回の調査では遺構面の大部分に攪乱が及んでいたが、攪乱の及んでいない地点においてピット1基を確認することができた。1-1a層の出土遺物が僅少なため確証はないが、ピットの帰属時期も弥生時代中期後葉とみてよいと考える。

今次調査に隣接する地点では、本発掘調査に至っている事例は僅少である。とはいえ、確認調査の蓄積によって、部分的ながらも今回の調査同様、弥生時代中期～中世までの遺構・遺物を確認し得た事例が増加しつつある。このことから、周辺には当該時期の遺構が分布していた可能性が窺われる。極めて限定的な調査成果ではあるが、遺跡の遺構分布を把握する上で重要な知見を得ることができた。

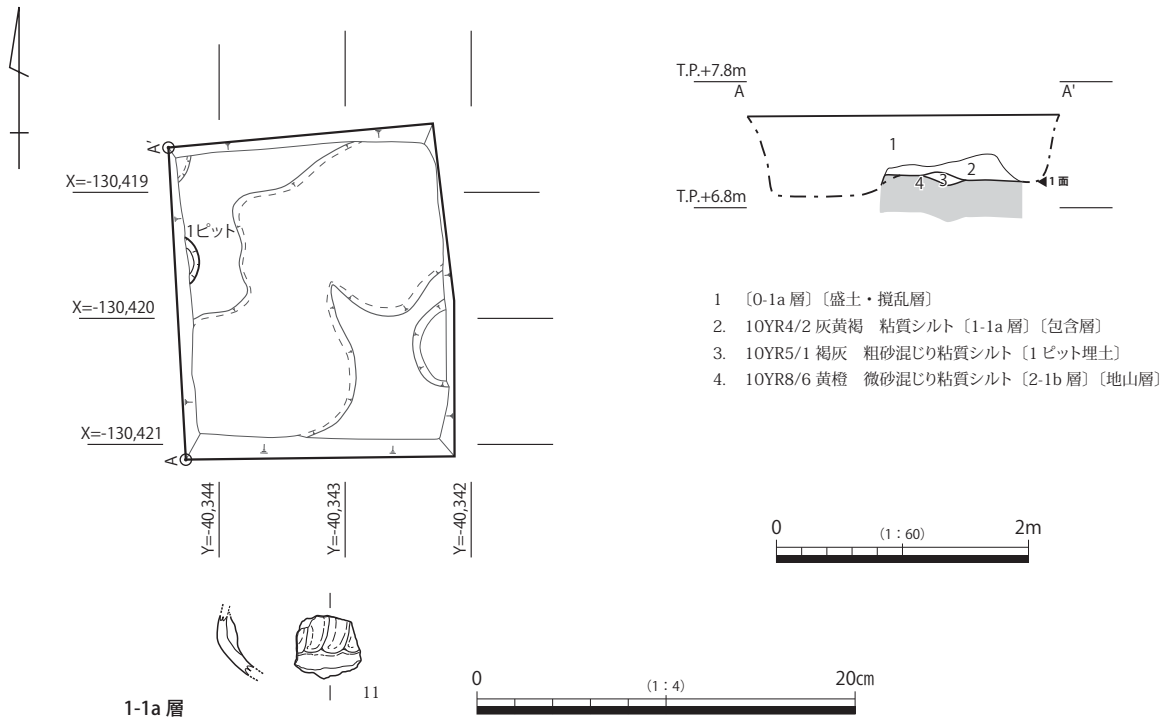


図 15 平・断面図・出土遺物 (郡遺跡 2022-1)

第3節 牟礼遺跡・溝咋遺跡

1. 牟礼遺跡 2021-2 (図 16～18 図版 6)

調査地 園田町794番7、795番5

調査面積 3.6㎡

調査期間 令和4年1月11日

調査担当 富田卓見



図 16 牟礼遺跡・溝咋遺跡調査地位置図

はじめに 園田町において計画された個人住宅の建築に伴い、1.8 × 2 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別6層、細別8層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：近～現代耕作土層（1-1a～1-3a層）、2層：中～近世に形成されたと目される耕作土層（2-1a層）、3層：古代～中世にかけての遺物を含む土壌層（3-1a層）、4層：古代以前に堆積したとみられる水成層（4-1b層）、5層：弥生時代後期の遺物を含む土壌層とみられる層準（5-1a層）の順に堆積が認められた。3層及び5層は、遺物を含む暗色味を帯びた古土壌であることから、本来的には当該層準の下面で遺構が検出できる可能性が高い層準とみられる。

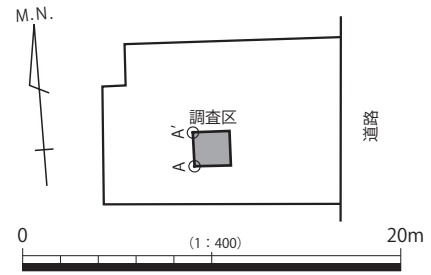


図17 調査区配置図
(牟礼遺跡 2021-2)

遺構・遺物 今次調査では、0-1a層とした現代盛土の層厚が厚かったことに加え、掘削当初から湧水が激しく壁面崩壊の危険性が生じたため、いずれの層界においても平面的な調査を行うことができなかった。壁面断面の観察からは、先に述べたように3-1a層下面や5-1a層下面といった層界において遺構が検出できる可能性が想定されたが、遺構を確認するには至らなかった。

遺物は3-1a層から土師器・瓦器・須恵器が、5-1a層から弥生土器がそれぞれ出土した。このうち、図示可能なものを図18に掲げた(12～15)。12～14は3-1a層から出土した遺物である。12は土師器皿である。細片のため口径の復元に不安を残すが、復元径15.7cm、残存高2.2cmを測り、やや直線的に開く口縁部に一段ナデを施す。13は瓦器碗。内外面ともにヘラミガキは密で、口縁端部内面に一条の沈線を施す。楠葉型瓦器碗Ⅰ-3～Ⅱ-1期に属するものだろうか。いずれも12世紀前半の所産。14は須恵器杯Bの底部片である。細片のため詳細な時期は決し難い。9世紀の所産か。3-1a層出土資料は、上記のように大きく二時期の遺物が包含されている。15は5-1a層から出土した弥生土器高杯で

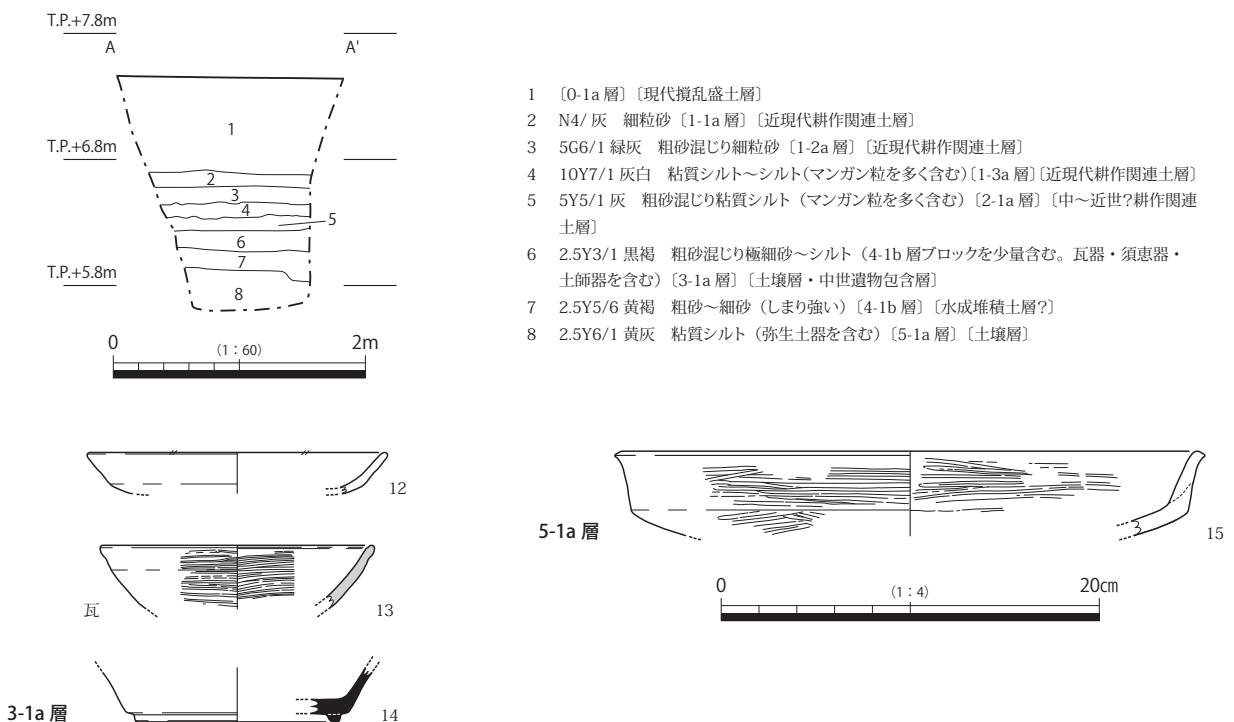


図18 平・断面図・出土遺物 (牟礼遺跡 2021-2)

ある。口縁部は外反しながら短く立ち上がっており、摂津V-2様式前後に該当するものとみられる。

まとめ 今回の調査では、壁面崩壊の危険性が生じたため平面的な調査を行うことができなかったが、限定された調査条件にも関わらず3-1a層、及び5-1a層から遺物を確認することができた。とりわけ、5-1a層から出土した弥生時代後期の土器は、周辺の既往調査ではほとんど認められないものの、ごく稀にその存在が確認されている（茨木市教育委員会2011）ことから、貴重な事例を追加する結果となった。詳細はさらなるデータの蓄積を俟って慎重に判断すべきではあるが、当該地周辺における弥生時代の地層対比に関わる重要な調査成果を得ることができたものと言えよう。

2. 溝咋遺跡 2022-1 (図16・19 図版6)

調査地 五十鈴町192番1

調査面積 6㎡

調査期間 令和4年8月22日

調査担当 木村健明

はじめに 五十鈴町において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西及び北に面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別5層、細別6層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a層）、1層：黄灰色粘質シルト層（1-1a層）、2層：暗色味の強い粘質シルト層（2-1a層）、3層：中世に形成されたとみられる暗色味が強く淘汰の良い層準（3-1a・3-2a層）、4層：淘汰の良い灰色粘質シルト層（4-1a層）の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 調査では湧水が著しく、掘削に伴って壁面崩落が進行したことから、いずれの層界においても平面的な調査を実施することはできなかった。掘削時にかりうじて為し得た地層断面の観察から、3層とした層準のうち、上層の3-1a層がいわゆる遺物包含層ないし遺構埋土、下層の3-2a層が遺構埋土にそれぞれ相当する可能性を想定するに至ったが、確証は得られていない。

遺物は、3-1a層及び3-2a層から中世の土師器・瓦器・須恵器といった遺物が一定量出土した（16～32）。いずれの遺物も残存率が高く、図示可能なものが多く認められる点も、3層そのものを遺構埋土とする想定を補強するものとみてよいかもしれない。16～29は3-1a層から出土した土師器・瓦器・須恵器である。土師器皿（16～20）は大小二者が認められ、小型のものが復元口径7.4～9.0cm、大型が復元口径13.0～14.0cmをそれぞれ測る。いずれも口縁部に一段ナデを施し、やや面取り気味に口縁端部を仕上げるものである。概ね京VII期古～中に属するものとみられる。瓦器椀（21～28）は25が楠葉型、それ以外が和泉型瓦器椀である。復元可能な個体（21・22）は口径14.8～15.2cm、器高4.8～4.9cmを測る。外面の分割ヘラミガキの間隔はやや疎らで、内面のヘラミガキもやや粗に施されることに加え、高台もやや退化していること等の諸点から、和泉型Ⅲ-1～2期に属するものとみられる。29は東播系の須恵器鉢である。口縁部を欠いており、帰属時期の詳細は不明である。以上のように3-1a層に含まれる土器は、12世紀後葉～13世紀前葉の所産とみることができよう。30～32は3-2a層から出土した土師器・瓦器である。30・31の土師器皿は、細片のため口径の復元には至らなかったが、いずれも口縁部に一段ナデを施し、端部をやや面取り気味に仕上げるもので、先に述べた3-1a層出土の土器が示す特徴と大差ない。32は瓦器皿である。いずれも12世紀後葉～13世紀前葉の所産とみられ、3-1a層と3-2a層の間にほぼ時期差はないものと考えてよいであろう。

まとめ 今次調査では、激しい湧水による度重なる壁面の崩落が生じたため、平面的な調査を行うことができなかった。とはいえ、3層から12世紀後葉～13世紀前葉の土器が良好な状態でまとまって

出土したことから、3層あるいは3層の一部を遺構埋土とする中世の遺構を確認したものと考えられる。なお、本調査区の南側では、道路の新設に伴って平成12年度に本発掘調査が実施され、弥生時代～中世の遺構が多数確認されている（茨木市教育委員会 2001）。今回検出した遺構も、既往の調査で確認した中世の居住域あるいは流路の一部を確認したものとみられよう。調査面積が限られており調査条件も不良であったため得られた成果は限定的ではあるが、遺跡内における遺構の分布を検討する上で重要な成果を得ることができた。

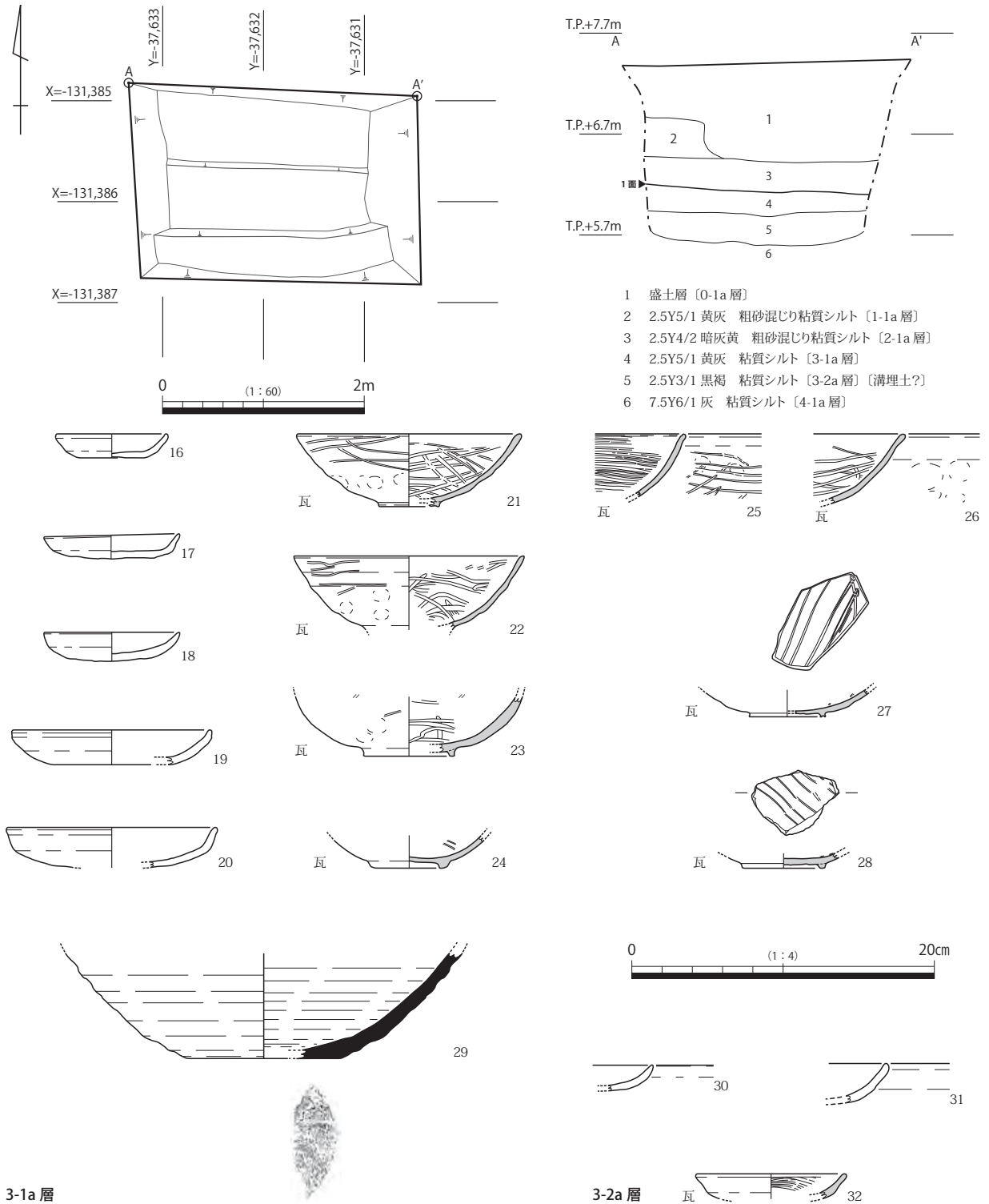


図19 平・断面図・出土遺物（溝咋遺跡 2022-1）

3. 溝咋遺跡 2022-2 (図 16・20 図版 6)

調査地 五十鈴町209番3、209番4、210番3

調査面積 6㎡

調査期間 令和5年3月2日

調査担当 富田卓見

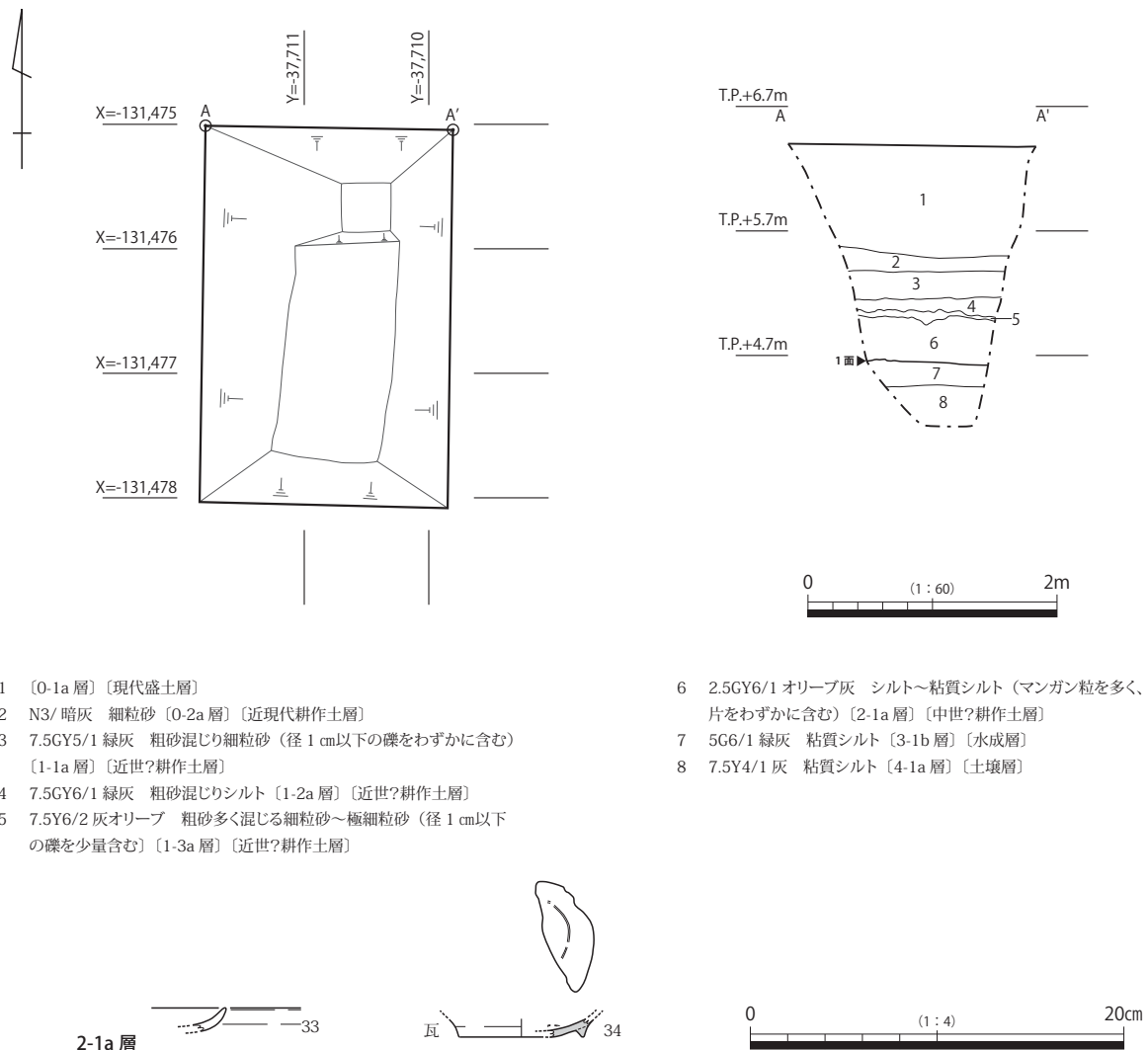
はじめに 五十鈴町において計画された個人住宅の建築に伴い、2 × 3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は東面する南北道路路面より約 0.3 m高く、敷地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別 5 層、細別 8 層に区分でき、上層から 0 層：現代盛土層・近現代耕作土層 (0-1a・0-2a 層)、1 層：近世に形成されたと目される耕作土層 (1-1a～1-3a 層)、2 層：中世に形成されたと目される耕作土層 (2-1a 層)、3 層：時期不明の淘汰の良い水成層 (3-1b 層)、4 層：時期不明の土壌層 (4-1a 層) の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 2 層 (2-1a 層) 下面において平面的な調査を行ったが、遺構は検出できなかった。

遺物は 1-1a 層と 2-1a 層中から土師器・瓦器が出土した。このうち 2-1a 層から出土したものを図示した (33・34)。いずれも細片が中心のため、詳細は明らかにしがたいが、概ね 12 世紀後半～13 世紀に属するものと考えられようか。

まとめ 今次調査では、中世の遺物を含む耕作土層以下の層準を確認することができた。遺構は検出し得なかったが、調査事例の僅少な周辺域において重要な知見を加える結果となった。



- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 [0-1a 層] [現代盛土層] 2 N3/ 暗灰 細粒砂 [0-2a 層] [近現代耕作土層] 3 7.5GY5/1 緑灰 粗砂混じり細粒砂 (径 1 cm 以下の礫をわずかに含む) [1-1a 層] [近世?耕作土層] 4 7.5GY6/1 緑灰 粗砂混じりシルト [1-2a 層] [近世?耕作土層] 5 7.5Y6/2 灰オーリーブ 粗砂多く混じる細粒砂～極細粒砂 (径 1 cm 以下の礫を少量含む) [1-3a 層] [近世?耕作土層] | <ul style="list-style-type: none"> 6 2.5GY6/1 オリーブ灰 シルト～粘質シルト (マンガン粒を多く、土器片をわずかに含む) [2-1a 層] [中世?耕作土層] 7 5G6/1 緑灰 粘質シルト [3-1b 層] [水成層] 8 7.5Y4/1 灰 粘質シルト [4-1a 層] [土壌層] |
|--|--|

図 20 平・断面図・出土遺物 (溝咋遺跡 2022-2)

第4節 中条小学校遺跡・東奈良遺跡

1. 中条小学校遺跡 2022-1 (図 21・23・24 図版 7・8)

調査地 駅前三丁目5番21

調査面積 約510㎡

調査期間 令和4年12月7日～令和5年2月8日

調査担当 木村健明

はじめに 駅前三丁目において計画された兼用住宅の建築に伴い、合計 12㎡の調査区を設定して確認調査を実施したところ、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を確認した。この結果を受けて事業主と協議を重ね、計画建築物の範囲に合計約 510㎡の調査区を設定して調査を行うに至った。本発掘調査は残土処理及び既存建築物の解体工事等の関係上、調査を行った順に北から A・B・C の 3 区に分割して実施したが、ほぼ一体のものであることから、ここでは一括して報告する。調査地の現況地盤は北面する東西道路路面より 0.1 m ほど高く、敷地内は概ね平坦である。

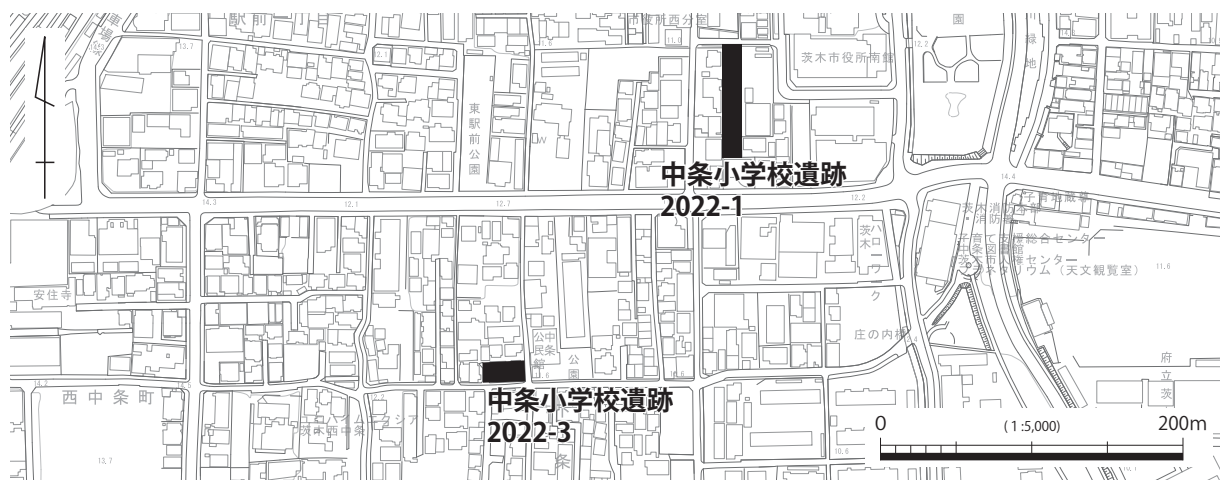


図 21 中条小学校遺跡調査地位置図



図 22 中条小学校遺跡・東奈良遺跡調査地位置図

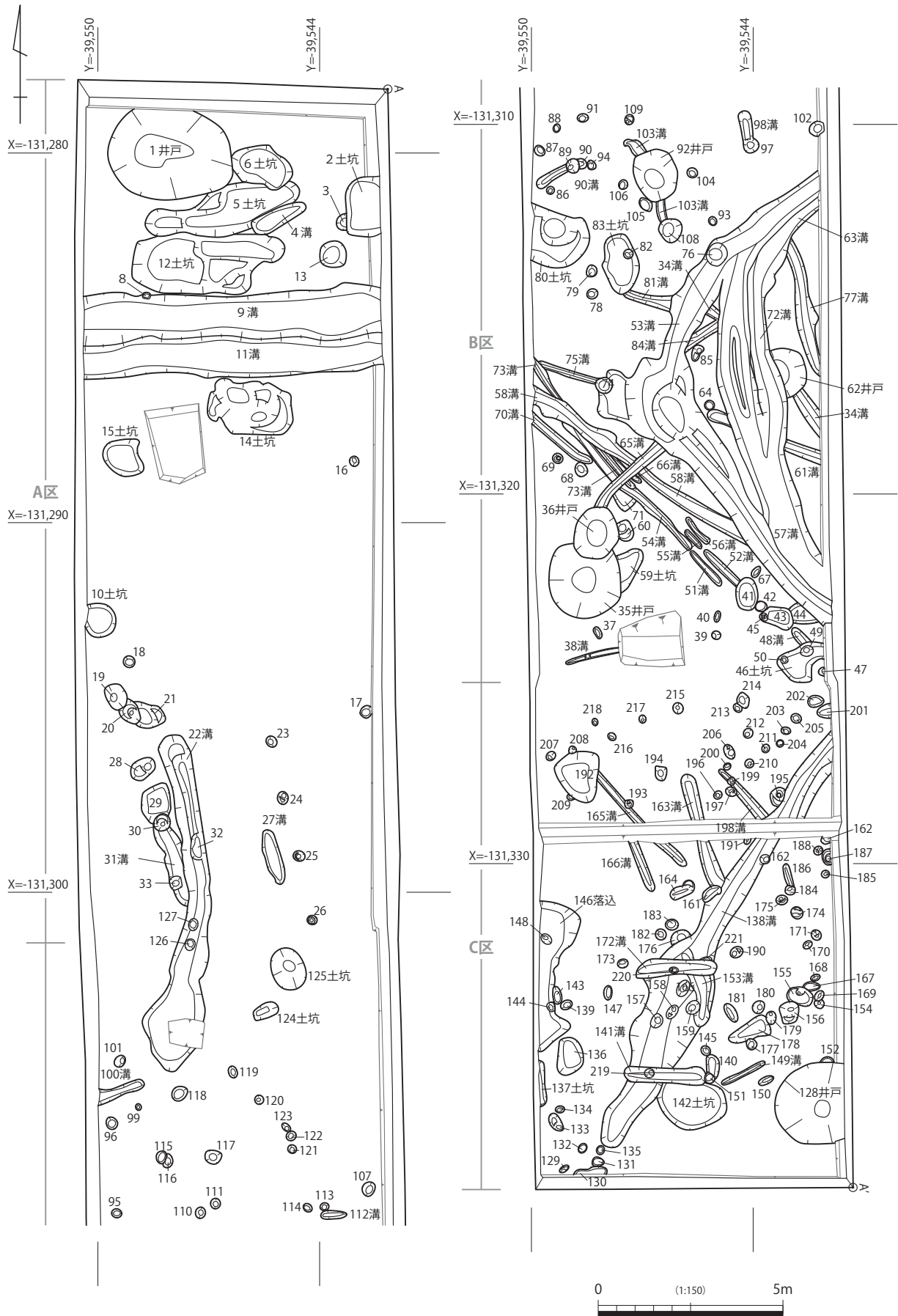


図23 調査区平面図（中条小学校遺跡 2022-1）

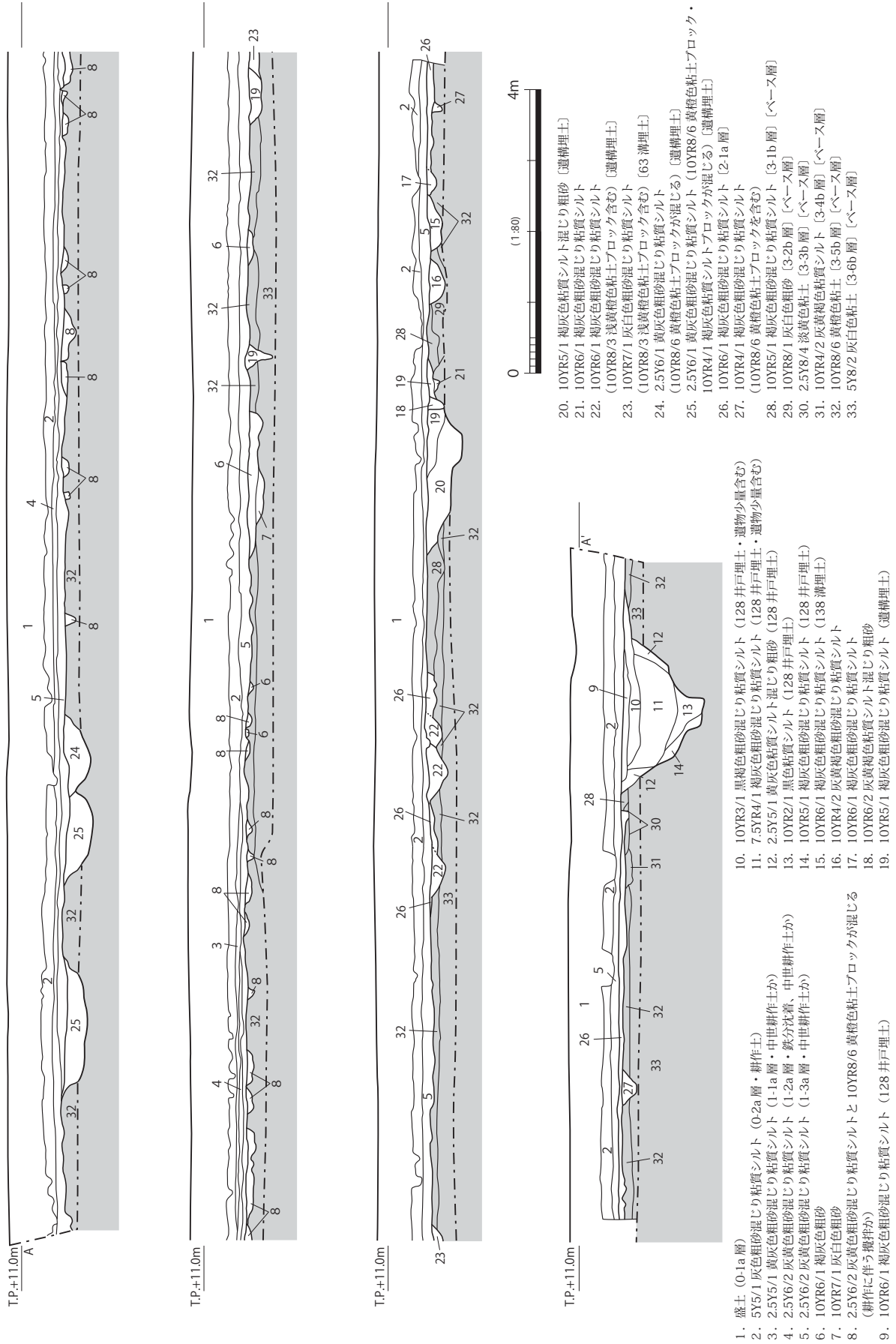


図 24 調査区東断面図 (中条小学校遺跡 2022-1)

なお、今回の報告においては調査の概要を示すに留め、遺物の報告を含む詳細は他日を期したい。

基本層序 調査地の基本層序は大別3層、細別12層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代耕作土層（0-1a・0-2a層）、1層：中世～近世にかけて形成されたと目される耕作土層（1-1a～1-3a層）、2層：調査区の南半部に部分的に分布する時期不明の土壌層（2-1a層）、3層：ベース面を形成する弥生時代以前に堆積したとみられる水成層（3-1b～3-6b層）の順に堆積が認められた。

このうち、2-1a層とした褐灰色を基調とする土壌は、一見すると遺構埋土に見紛うものの、遺構面の低平な地点を中心に広範に分布していることに加え、遺構との重複関係が認められる箇所では一部の遺構掘方が当該層準の付近で不明瞭となり、これに収斂されるようにも見受けられたこと等の諸点から、基本層序を構成する地層として把握可能なものと判断できる。当該層準を除去することで初めて検出可能となる遺構も存在することから、調査では2-1a層を人力で慎重に取り除いて調査を実施した。

なお、調査区全体に1層による影響が深く及ぶため、遺構面は本来の微地形を反映していないことが予想されるが、概ね北から南に緩やかな傾斜が認められ、その比高は北端と南端で約0.1mを測る。

遺構 調査では、1-1a層とした中～近世の耕作土層、及び部分的に分布する2-1a層を除去した面を1面として、平面的な調査を実施した。結果として、調査区のほぼ全域において総数218基に及ぶ遺構を確認するに至っている。検出した遺構の内訳は、井戸6基、溝38条、土坑16基、小穴158基である。これら検出した遺構は、いずれも1層とは異なる起源不明の褐灰色～黒褐色を基調とする埋土で充填されていることから、基本的には基底面遺構として把握すべきものと考えられる。なお、遺構から出土した遺物は、その大部分が弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭にかけてのものである。

次に、主だった遺構を取り上げてその概要を記述する。井戸は、調査区の北端及び南半において検出した。いずれも素掘のもので、平面形状はやや不整な円形ないし長楕円形を呈し、大振りなものは直径1.9～3.4m、小振りなものは直径1.2～1.4mを測る。検出面からの深さから深浅二者が認められ、前者で1.1～1.35m、後者で0.5mをそれぞれ測る。井戸の断面形状は、その多くが中ほどで屈曲する二段掘りのすり鉢状を呈しており、埋土の下層からは弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が良好な遺存状態で出土した。

溝は、調査区の北端及び南半において多数検出した。いずれも調査区外に延びているため、平面形の全容を窺い知ることはできなかったが、検出した溝は大きくわけて9・11・58・75・138溝のように直線的に延びるもののほか、53・63溝のように大きく円弧を描くものの二者が認められる。とりわけ調査区中央部付近で検出した溝は、激しく重複しあっており、円弧を描くものはその重複関係から北西～南東方向を指向して直線的に延びるものに後出する傾向にあることが看取できる。各溝の性格は今後の遺物整理を経た上で慎重に検討する必要があるが、土地利用の変遷を示すものとして重要な成果を得ることができたといえるだろう。

小穴は、調査区の南半部を中心として検出した。このうちの一部では、検出面からの深さ30cmを超過し、かつ断面に柱痕が認められるものも散見されたことから、掘立柱建物を構成する柱穴であった可能性が想起される。現地調査の段階では、明らかに建物と認識できるまとまりを認識できなかったが、埋土の詳細な検討や小穴に含まれる遺物の検討を通じて、建物を復元していく必要がある。

まとめ 1面の遺構面で調査を行い、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭にかけての井戸や溝をはじめとして多くの遺構・遺物を確認することができた。今回検出した井戸や溝といった遺構の詳細な検討のもと、周辺のさらなるデータの蓄積を通じて遺跡内の構造把握に努める必要がある。

2. 中条小学校遺跡 2022-2 (図 22・25 図版 9)

調査地 新中条町48番1

調査面積 6m²

調査期間 令和4年4月14日

調査担当 木村健明

はじめに 新中条町において計画された個人住宅の建築に伴い、2 × 3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は概ね平坦で、東面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は3層に区分でき、上層から0層：現代盛土層 (0-1a層)、1層：中世耕作土層 (1-1a層)、2層：ベース面を形成する水成層ないし埋没段丘構成層 (2-1b層) の順に堆積が認められた。

遺構・遺物 遺構の検出を期して1層 (1-1a層) 下面において平面的な調査を実施したが、遺構・遺物といった埋蔵文化財を確認することはできなかった。

まとめ 1層形成時の影響が強く及んだためか、今次調査では遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

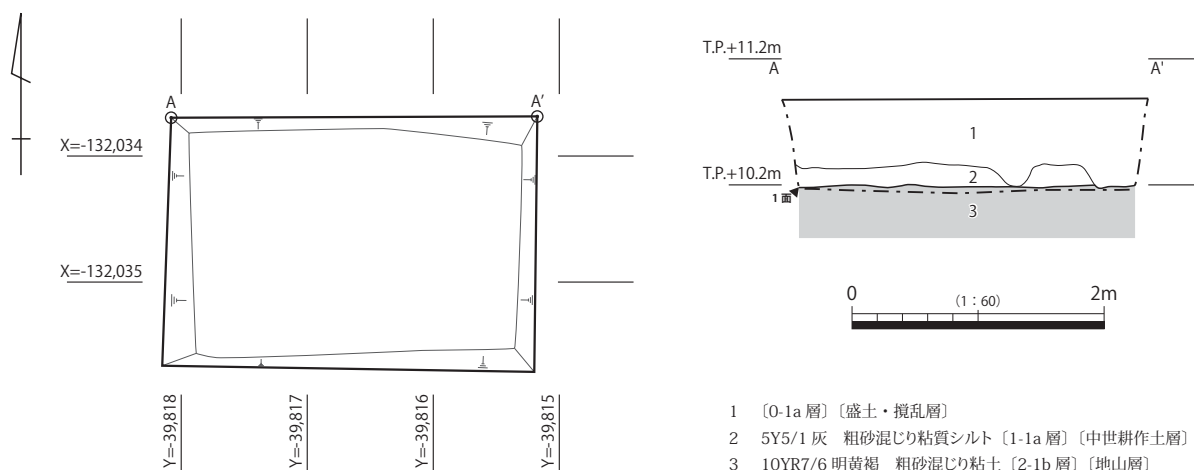


図 25 平・断面図 (中条小学校遺跡 2022-2)

3. 中条小学校遺跡 2022-3 (図 21・26 図版 9)

調査地 下中条町2番15

調査面積 6m²

調査期間 令和4年4月21日

調査担当 木村健明

はじめに 下中条町において計画された個人住宅の建築に伴い、2 × 3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は概ね平坦で、南面する東西道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別3層、細別7層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代耕作土層 (0-1a～0-3a層)、1層：中世に形成されたと目される耕作土層 (1-1a層)、2層：ベース面を形成する淘汰の良い水成層及び古土壌 (2-1b～2-3b層) の順に堆積が認められた。なお、1層の分布は極めて限定的であり、0-3a層による剝削の影響が極めて強く及んでいたことを示唆している。

遺構・遺物 遺構の検出を期して1層 (1-1a層) 下面において平面的な調査を実施し、結果として遺構・遺物を確認した。検出した遺構の内訳は溝1条、ピット2基である。1溝は、調査区中央部で南側の掘方を確認するに留まったため平面形の全容を窺い知ることはできなかったが、東西方向に延びる幅広の溝とみられる。検出幅1.7 m以上、検出面からの深さは最も深い箇所でも48 cmを測る。溝の埋土は、ベースを形成する2-1b層以下の偽礫を多数包含する淘汰の悪いものであり、上層からは近世に

第3章 調査の成果

帰属する遺物がまとまって出土した。ピットは調査区南東隅で2基を検出した。いずれも長楕円形の平面形を示し、長径0.3 m、検出面からの深さは2ピットが14cm、3ピットが7cmをそれぞれ測る。埋土は、いずれも起源不明のやや淡い色調のものを基調とする。いずれのピットからも遺物は認められず、帰属時期は不明とせざるを得ない。

遺物は、1溝の埋土上層を中心として磁器・平瓦・土師器が出土した。土師器は大半が炮烙であり、近世の所産と考えられる。

まとめ 調査では、1層下面において近世の溝、及び時期不明のピットを確認した。本調査地周辺の既往の調査では、今次調査の1面に比定可能な遺構面より弥生～古墳時代にかけての遺構・遺物が確認されている。今回検出した時期不明のピットがこれに相当するかについては、周辺の成果を総合して遺構の分布状況を検討する必要があるが、遺跡内の様相把握にあたり重要な知見を加えることができた。

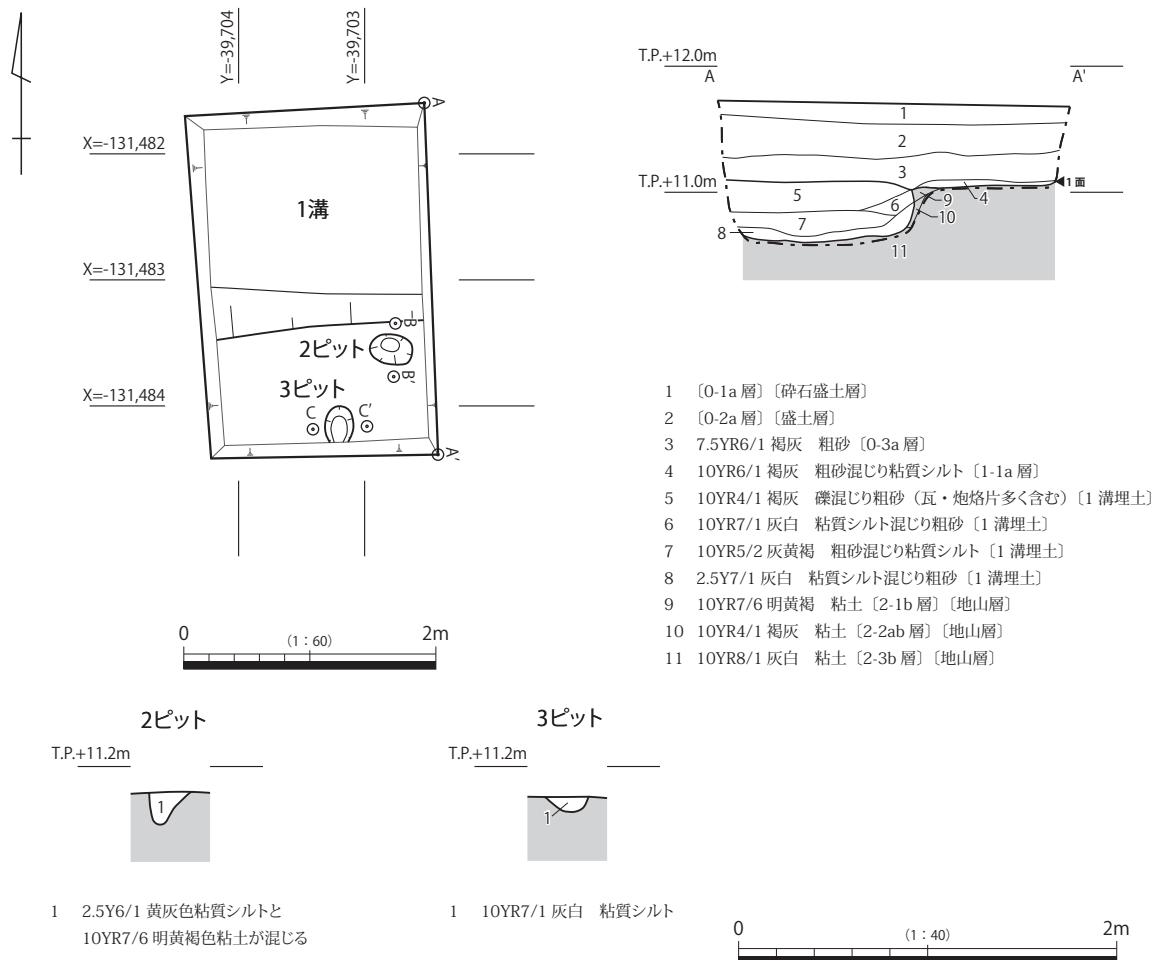


図26 平・断面図 (中条小学校遺跡 2022-3)

4. 東奈良遺跡 2022-2 (図22・27 図版10)

調査地 東奈良二丁目697番4

調査面積 9㎡

調査期間 令和4年12月15日

調査担当 富田卓見

はじめに 東奈良二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、3×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は、北及び西に面する道路面より0.2 m程度高い。なお、敷地内はほぼ平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別6層、細別15層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代耕作土層（0-1a～0-4a層）、1層：近世～近代に形成されたと目される耕作土層（1-1a～1-3a層）、2層：中世に形成されたと目される耕作土層（2-1a～2-3a層）、3層：やや粗粒の堆積物からなる時期不明の水成層（3-1b層）、4層：淘汰が良く粘性の強い堆積物からなる時期不明の水成層（4-1b・4-2b層）、5層：やや淘汰が悪くしまりの良い暗色味の強い土壌層（5-1a・5-2a層）の順に堆積が認められた。なお、5層を除きいずれの層準からも遺物は出土していないため、時期の比定は層相からの想定の域を超えるものではない。

遺構・遺物 遺構の検出を期して層界が明瞭な4層中（4-1b層下面）において平面的な調査を実施したが、遺構は検出できなかった。なお、地層の観察から5層下面についても調査を実施すべきところであると予想されたが、湧水による壁面崩落の危険性が生じたため、調査を断念せざるを得なかった。

遺物は、5層とした5-1a～5-2a層から土師器・須恵器片が出土した。このうち図示可能なものを図27に掲げた（35）。35は須恵器壺の口縁部片である。外面には自然釉が付着している。細片のため詳細な帰属時期は不明だが、概ね6世紀前半の所産とみることができようか。

まとめ 遺構は確認できなかったが、最下部で確認した土壌層（5層）からは古墳時代後期の遺物が出土した。当該土壌層は、周辺で確認できている弥生時代～古墳時代の遺物包含層と層相が近似することから、遺構面の様相把握にあたり重要な知見を加えることができたものと考えられる。

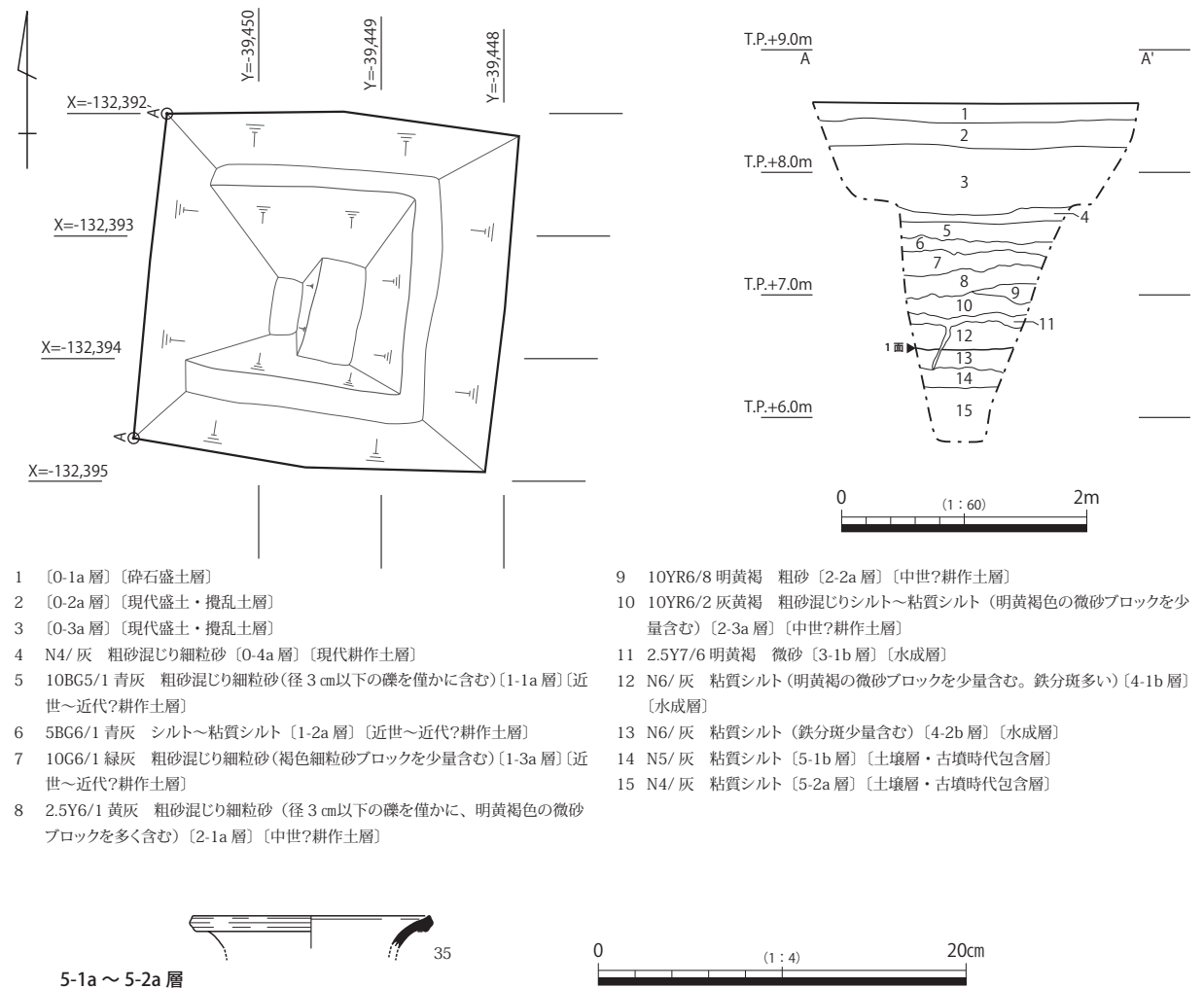


図27 平・断面図・出土遺物（東奈良遺跡 2022-2）

第5節 沢良宜城跡・西方浄土寺跡・常楽寺跡

1. 沢良宜城跡 2021-2 (図 28・29 図版 10)

調査地 美沢町475番8

調査面積 10㎡

調査期間 令和4年3月17日～3月18日

調査担当 木村健明

はじめに 美沢町において計画された個人住宅の建築に伴い、建築予定地の北側に2×3 m (A区)、南側に2×2 m (B区)の調査区をそれぞれ設定して調査を行った。調査地の現況地盤には段差があり、南及び西に面する道路面よりも建築予定地が約0.8 m程度高い。

基本層序 地層断面の観察の結果、いずれの調査区も同様の堆積状況が認められることを確認したため、ここでは一括して記述する。調査地の基本層序は0層とした現代盛土層・現代耕作土層(0-1a～0-5a層)のみを確認した。下位層の様相を窺い知るべく追加した調査区においても、現代耕作土層を確認するに留まっており、状況は不変であった。

遺構・遺物 遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することができなかった。

まとめ 今次調査では、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

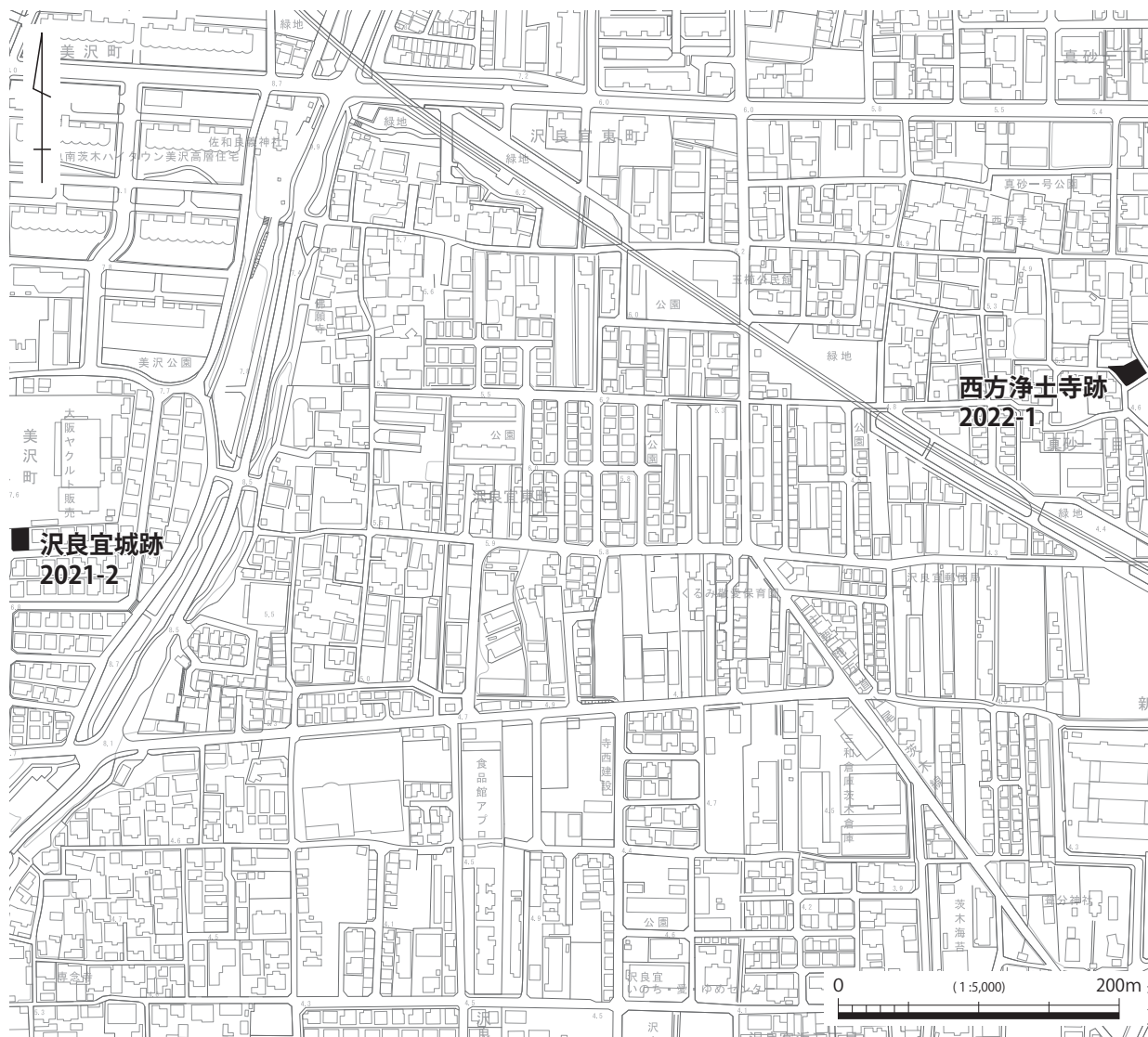
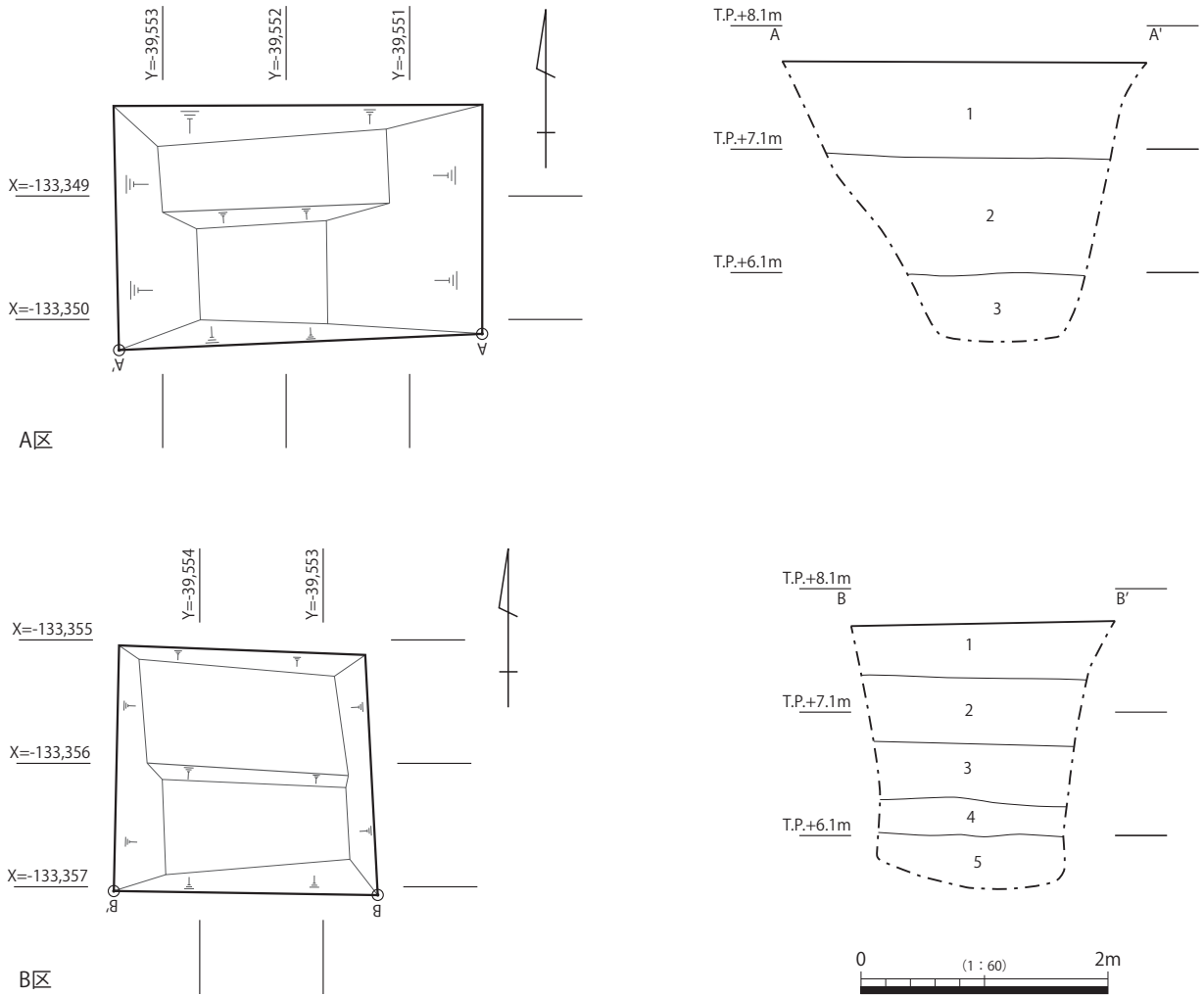


図 28 沢良宜城跡・西方浄土寺跡調査地位置図



- | | |
|--|--|
| <p>1 瓦・コンクリートガラ多く含む〔0-1a層〕〔建築時盛土層〕</p> <p>2 10YR8/2 灰白 粗砂（その他ブロック土多数混じる）〔0-2a層〕〔住宅地造成時盛土層〕</p> <p>3 5G6/1 緑灰 微砂～粘土（改良剤ブロック混じる）〔0-3a層〕〔住宅地造成時盛土層〕</p> | <p>4 5Y4/1 灰 粗砂混じり粘質シルト（コンクリート片含む）〔0-4a層〕〔旧耕作土層？〕</p> <p>5 7.5Y4/1 灰 粗砂混じり粘質シルト〔0-5a層〕〔旧耕作土層？〕</p> |
|--|--|

図 29 平・断面図（沢良宜城跡 2021-2）

2. 西方浄土寺跡 2022-1（図 28・30 図版 11）

調査地 真砂一丁目455番の一部

調査面積 6㎡

調査期間 令和4年8月15日

調査担当 木村健明

はじめに 真砂一丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3 mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は南面する東西道路路面より約0.4 m高く、敷地内は概ね平坦である。

基本層序 調査地の基本層序は大別3層、細別7層に区分でき、上層から0層：現代盛土層（0-1a・0-2a層）、1層：近世～近代に形成されたと目される盛土ないし整地層、2層：近世に堆積したとみられる水成層（2-1b～2-3b層）の順に堆積が認められた。このうち2層は、層相の観察から流路充填堆積物の可能性が高いと判断できる。

遺構・遺物 0層（0-2a層）下面で平面的な調査を実施したが、遺構を確認することはできなかった。下位層を確認すべく掘削を進めたところ、激しい湧水により壁面崩落の危険が生じたことから、2層を

確認した段階で調査を断念せざるを得なかった。

遺物は、2-1b層中より近世の炮烙片が出土した。

まとめ 今次調査では、遺構を確認することはできなかった。下半で確認した2層は、それ自体が流路充填堆積物とみられ、2-1b層中から出土した炮烙片から近世に埋積した流路を確認したものと考えられる。

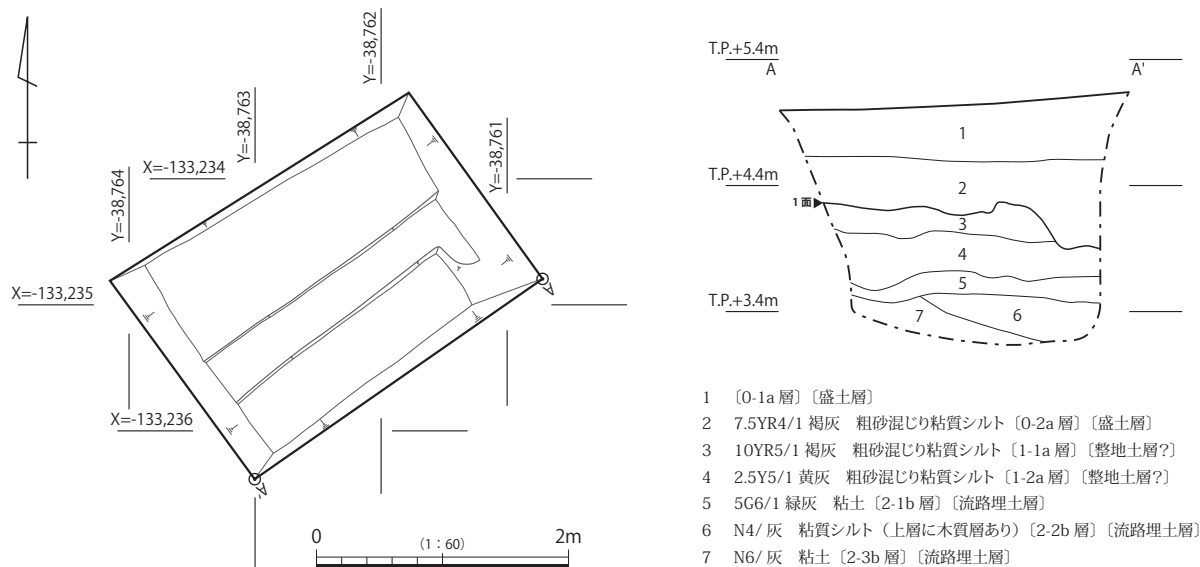


図30 平・断面図 (西方浄土寺跡 2022-1)

3. 常楽寺跡 2022-1 (図31・32 図版11)

調査地 蔵垣内三丁目395番1

調査面積 6㎡

調査期間 令和4年8月5日

調査担当 木村健明

はじめに 蔵垣内三丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じである。

基本層序 調査地の基本層序は大別3層、細別5層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代耕作土層 (0-1a・0-2a層)、1層：中世に形成されたと目される耕作土層 (1-1a層)、2層：時期不明の水成層 (2-1b・2-2b層) の順に堆積が認められた。2層は淘汰が良く粘性の強い2-1b層と粗砂を主体とする2-2b層に分かれ、いずれも上方細粒化傾向の一連の堆積物とみることができる。

遺構・遺物 遺構の検出を期して1層 (1-1a層) 下面において平面的な調査を実施したが、遺構は認められなかった。当該面では一見すると溝状遺構のように見受けられる2-1b層と2-2b層の境界を確認したが、地層断面観察の結果、上方細粒化傾向にある一連の堆積物が1層の耕作による削剥の影響で露出したものと判断するに至った。なお、より下位の層準を確認すべく掘削を進めようとしたが、激しい湧水のため壁面の崩落が著しく、調査を断念せざるを得なかった。

遺物は1-1a層から白磁片が出土した。微細な破片のため、詳細な帰属時期は不明とせざるを得ないが、概ね中世に帰属するものとみられる。

まとめ 今次調査では遺構は確認できなかったものの、1層より遺物を確認することができた。このことから、1層の形成時期は概ね中世に帰属するものと考えられる。周辺では既往の調査事例が少なく、重要な知見を加える結果となった。

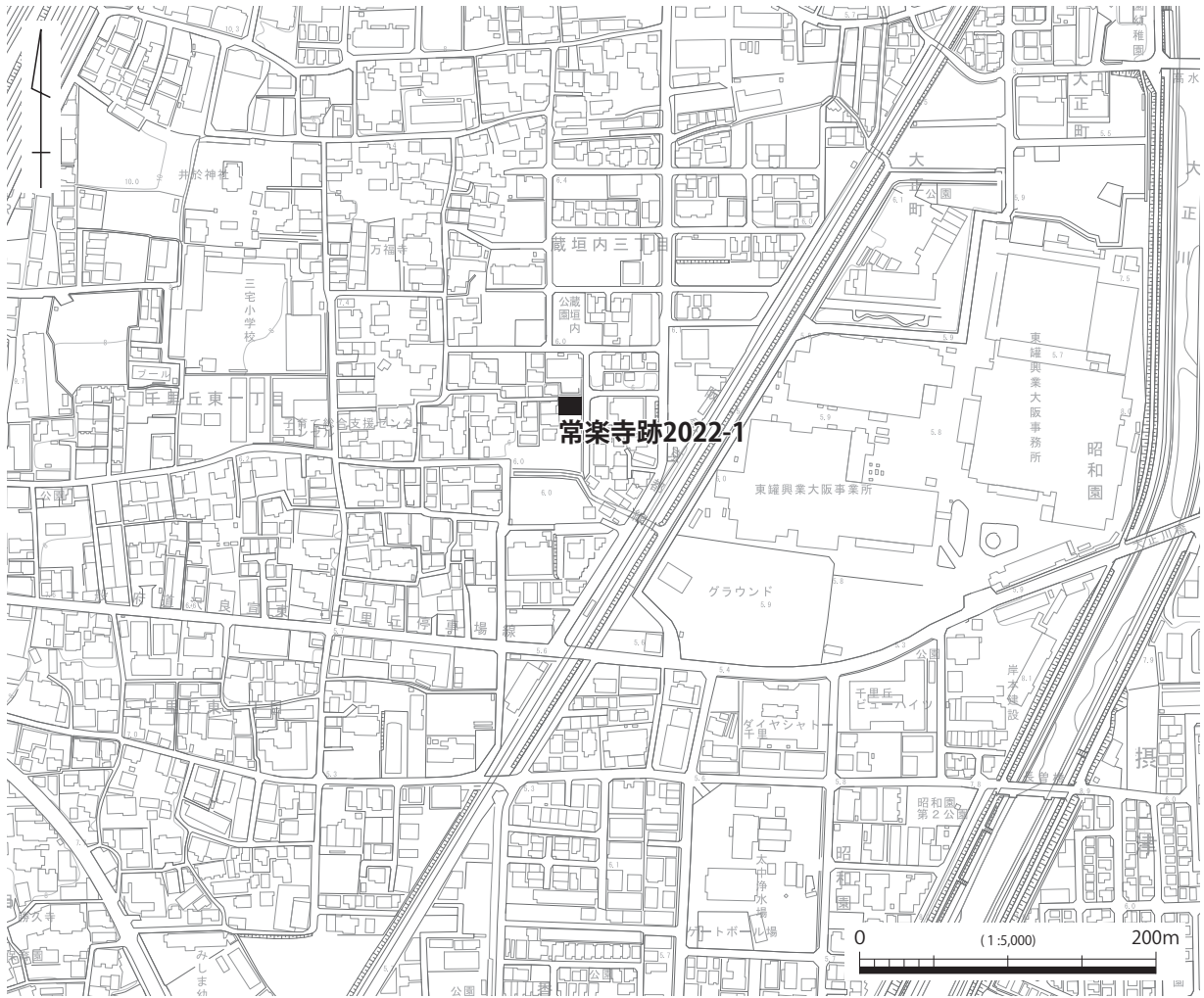


図31 常楽寺跡調査地位置図

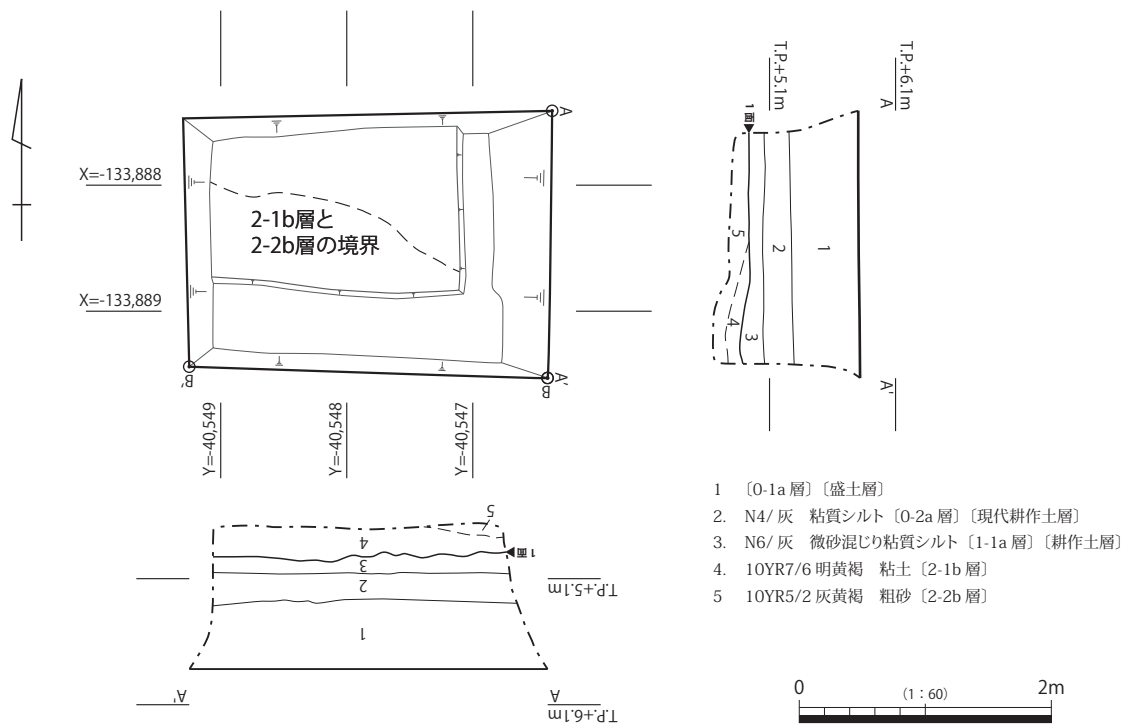


図32 平・断面図（常楽寺跡 2022-1）

第6節 安威城跡・その他

1. 安威城跡 2021-2 (図 33・34 図版 12)

調査地 安威二丁目243番、244番1

調査面積 10㎡

調査期間 令和4年1月31日～2月1日

調査担当 木村健明

はじめに 安威二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、建築予定地の西側に 2 × 2.5 m (A区)、東側に 2 × 2.5 m (B区) の調査区をそれぞれ設定して調査を行った。調査地の現況地盤は西面する南北道路面とほぼ同じ高さで、敷地内は概ね平坦である。

基本層序 地層断面の観察の結果、分布の違いは認められるものの、いずれの調査区においても同様の堆積状況が認められることを確認したため、ここでは一括して記述する。調査地の基本層序は大別5層、細別9層に区分でき、上層から0層：現代盛土層 (0-1a層)、1層：近～現代に形成されたと目される耕作土層 (1-1a層)、2層：鉄分が多く沈着する中世～近世に形成された可能性のある耕作土層 (2-1a層)、3層：古墳時代以前に堆積したとみられる層準 (3-1b～3-4b層)、4層：0.5 mまでの礫を多く含む砂礫層 (4-1b・4-2b層) の順に堆積が認められた。なお、1-1a・3-1b～3-4b・4-1b層についてはA区のみ分布しており、その違いは2層及び0層の形成に伴う削剥に起因している。3層以下の層準については、層相から流路充填堆積物ないしは扇状地堆積物の可能性が高いと推定できる。

遺構・遺物 既往の調査成果を勘案し、遺構の検出を期して0層 (0-1a層) 下面及び2層 (2-1a層) 下面において平面的な調査を実施したが、遺構は認められなかった。

遺物は、3-4b層 (A区) 及び2-1a層 (B区) から土師器・須恵器片が出土した。出土量が少ない上に細片が中心であったが、かろうじて図示可能なものを図 34 に示した (36)。36は3-4b層から出土した須恵器高杯片である。細片のため詳細は明らかではないが、概ね6世紀後半代の所産とみられる。

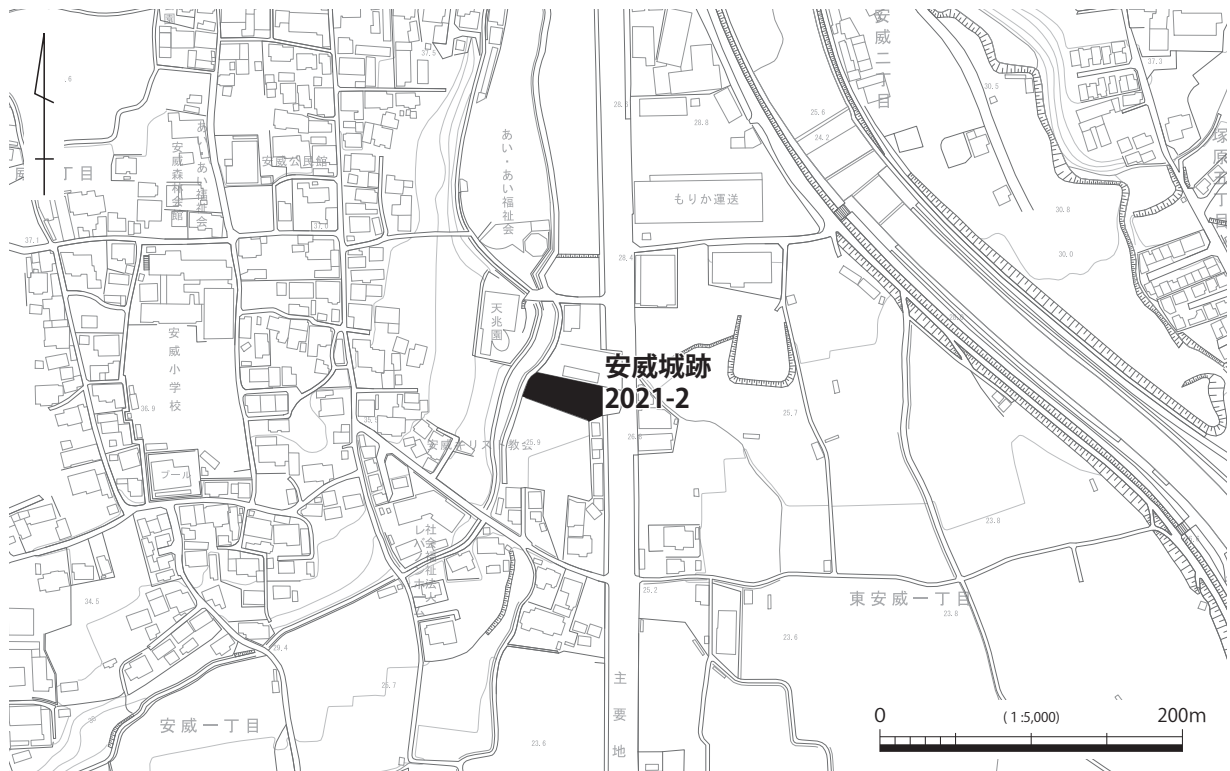


図 33 安威城跡調査地位置図

まとめ 今次調査では遺構は確認できなかったものの、2～3層にかけて遺物を確認することができた。3層以下の粗粒の堆積物の評価は、今回出土した遺物や周辺の既往の調査成果を総合的に捉えつつ、周辺のさらなる調査成果の追加を俟って慎重に判断する必要があるが、本調査地の周辺では既往の調査事例が少ないことから、重要な知見を加える結果となった。

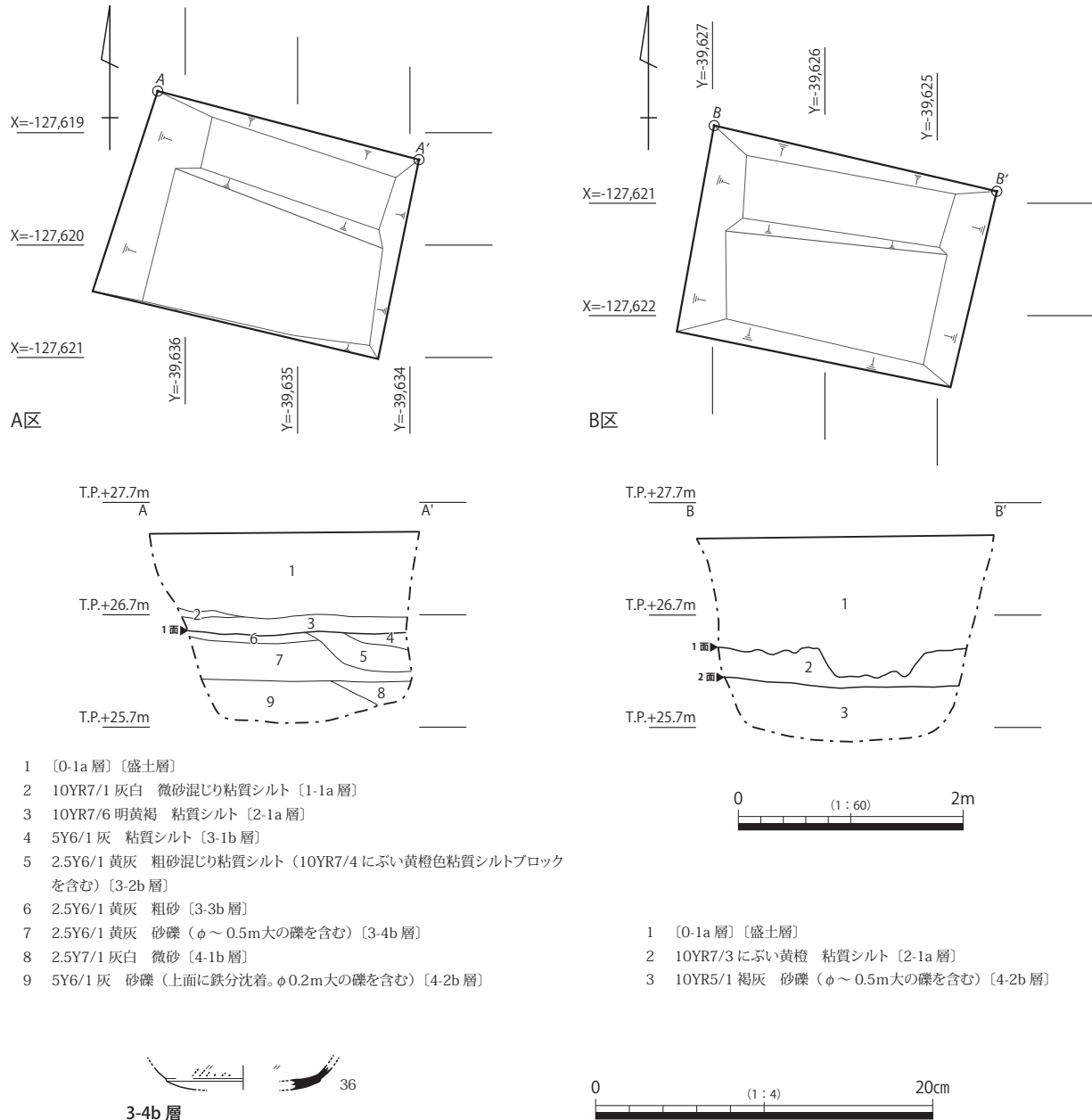


図34 平・断面図・出土遺物 (安威城跡 2021-2)

2. 包蔵地外試掘 (図35・36 図版12)

調査地 玉櫛二丁目856番

調査面積 6㎡

調査期間 令和4年10月11日

調査担当 富田卓見

はじめに 玉櫛二丁目において計画された個人住宅の建築に伴い、2×3mの調査区を設定して調査を行った。調査地の現況地盤は、北面する東西道路路面より約0.3～0.4m高い。

基本層序 調査地の基本層序は大別5層、細別11層に区分でき、上層から0層：現代盛土層・現代

第3章 調査の成果

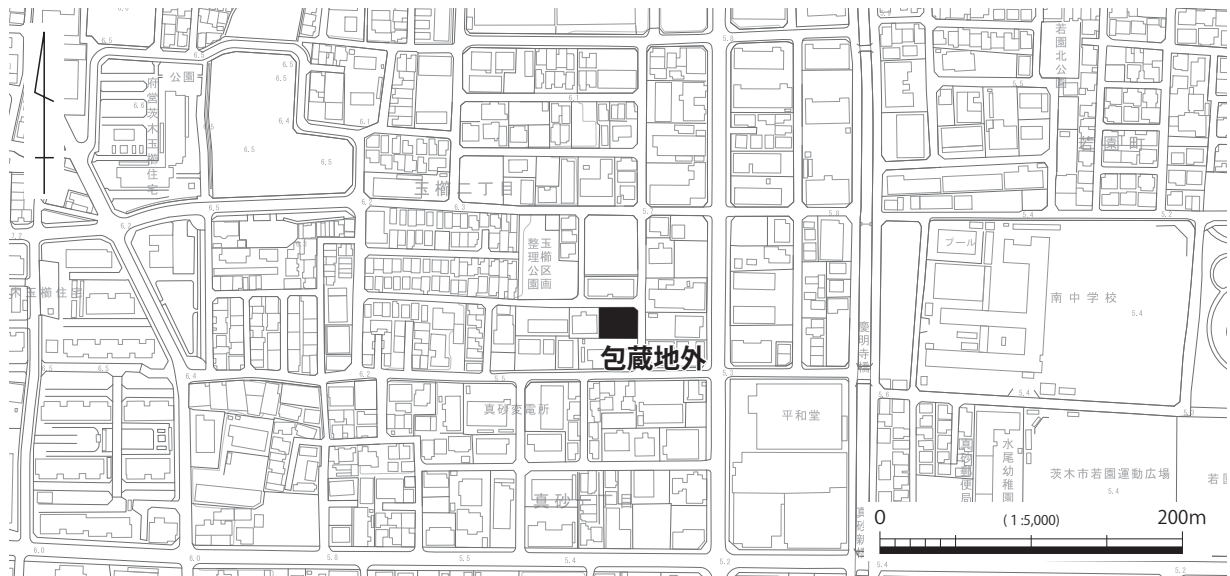


図 35 調査地位置図

耕作土層 (0-1a ~ 0-6a 層)、1 層:近世~近代に形成されたと目される耕作土層 (1-1a・1-2a 層)、2 層:時期不明の耕作土層 (2-1a 層)、3 層:時期不明の耕作土層 (3-1a 層)、4 層:時期不明の土壌層ないし水成層 (4-1ab・4-2ab 層) の順に堆積が認められた。なお、4 層は暗色味の強い粘質シルトであり、土壌化が進行している可能性もあるが、湧水が激しく部分的な確認に留まったため詳細は明らかでない。

遺構・遺物 遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認することができなかった。

まとめ 今次調査では遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

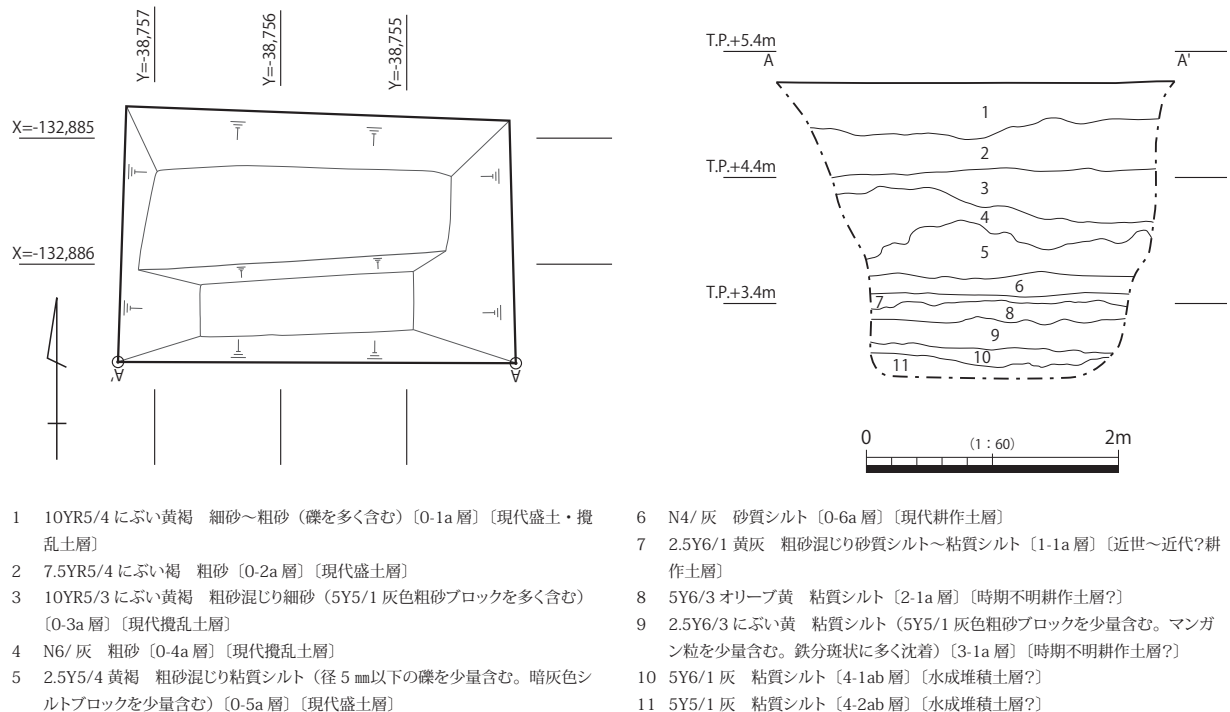


図 36 平・断面図 (包蔵地外試掘)

[参考文献]

茨木市教育委員会 2001 『平成 12 年度発掘調査概報』

茨木市教育委員会 2011 『平成 22 年度発掘調査概報—個人住宅建築に伴う発掘調査報告—』

写 真 图 版

1. 茨木遺跡 2021-9
1面完掘状況（南から）



2. 茨木遺跡 2021-9
調査区北壁断面（南から）



3. 茨木遺跡 2022-1
調査区西壁断面（東から）





1. 茨木遺跡 2022-2
調査区北壁断面（南から）

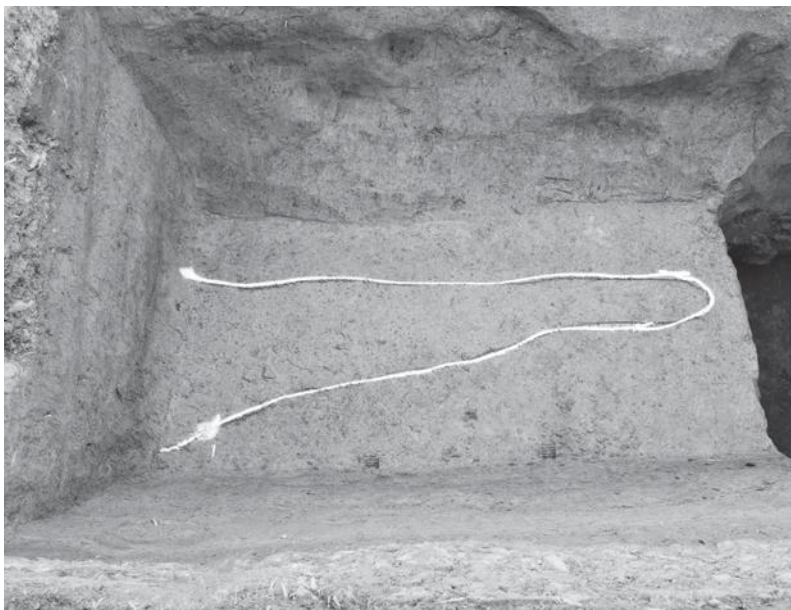


2. 茨木遺跡 2022-3
調査区西壁断面（東から）



3. 茨木遺跡 2022-4
調査区東壁断面（西から）

1. 茨木遺跡 2022-5
1面完掘状況（東から）



2. 茨木遺跡 2022-5
調査区北壁断面（南から）



3. 茨木遺跡 2022-5
1面1溝断面（北から）





1. 春日遺跡 2021-5
1面完掘状況（西から）



2. 春日遺跡 2021-5
調査区北壁断面（南から）



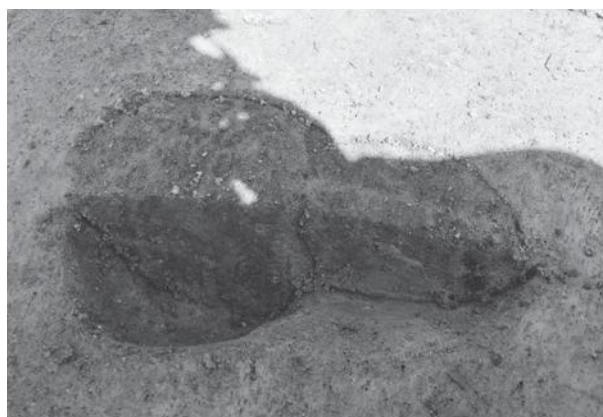
3. 春日遺跡 2021-5
1面1土坑断面（北から）



1. 中穂積遺跡 2022-1 1面完掘状況 (西から)



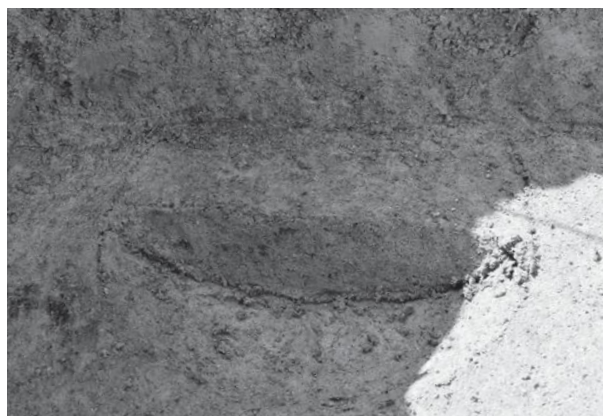
2. 調査区北壁断面 (南から)



3. 1面1・2ピット断面 (南から)



4. 1面3ピット断面 (南から)



5. 1面5ピット断面 (北から)



1. 牟礼遺跡 2021-2
調査区西壁断面（東から）



2. 溝咋遺跡 2022-1
調査区北壁断面（南から）



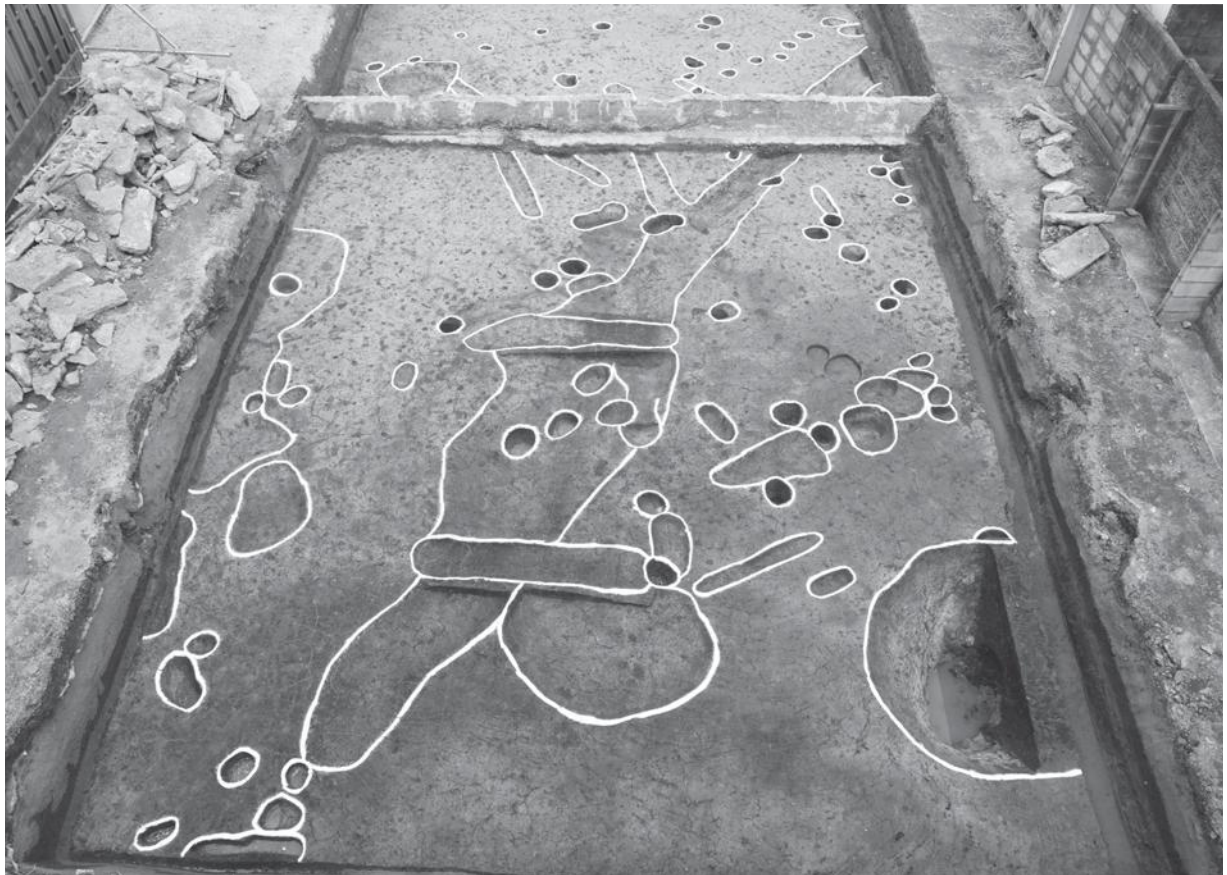
3. 溝咋遺跡 2022-2
調査区北壁断面（南から）



1. 中条小学校遺跡 2022-1 A区1面完掘状況（南から）



2. 中条小学校遺跡 2022-1 B区1面完掘状況（北から）



1. 中条小学校遺跡 2022-1 C区1面完掘状況（南から）



2. 中条小学校遺跡 2022-1 調査区東壁断面（南西から）

1. 中条小学校遺跡 2022-2
調査区北壁断面（南から）

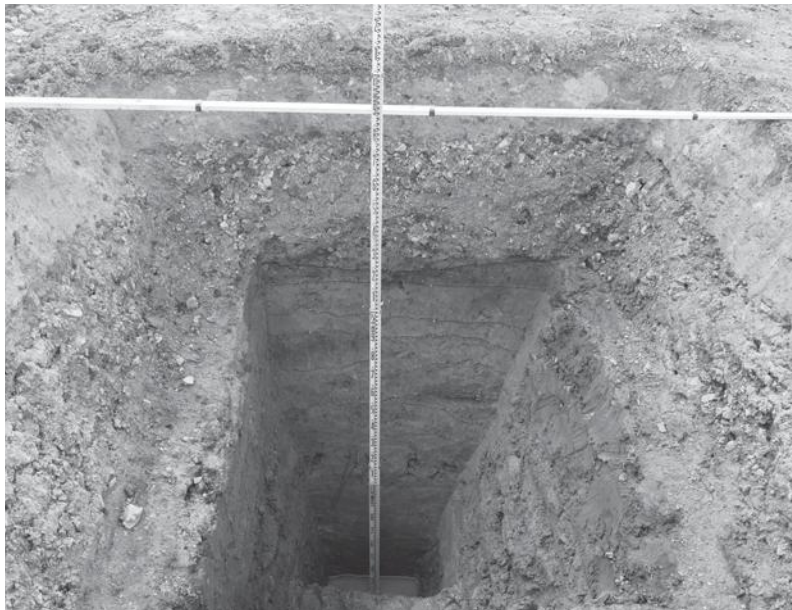


2. 中条小学校遺跡 2022-3
1面完掘状況（北から）

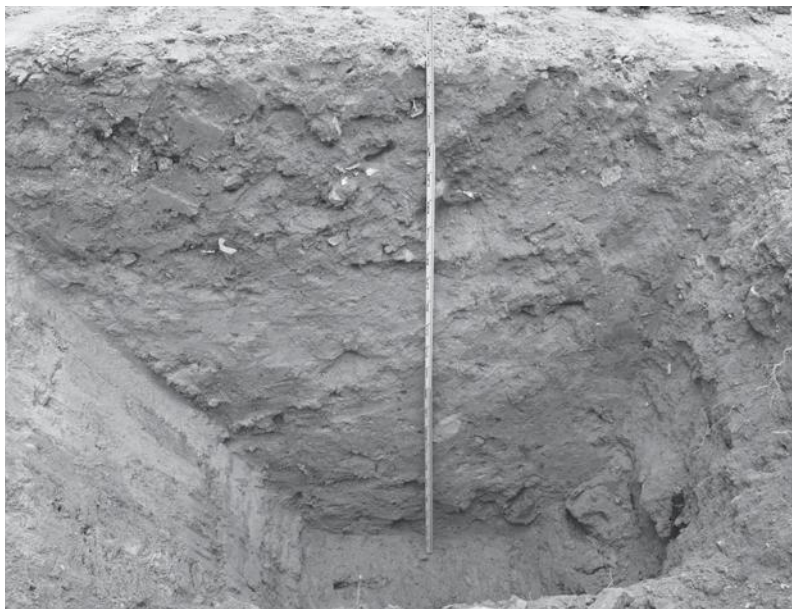


3. 中条小学校遺跡 2022-3
調査区東壁断面（西から）





1. 東奈良遺跡 2022-2
調査区西壁断面（東から）



2. 沢良宜城跡 2021-2
A区南壁断面（北から）



3. 沢良宜城跡 2021-2
B区南壁断面（北から）

1. 西方浄土寺跡 2022-1
調査区南壁断面（北から）



2. 常楽寺跡 2022-1
1面完掘状況（西から）



3. 常楽寺跡 2022-1
調査区南壁断面（北から）





1. 安威城跡 2021-2
A区北壁断面（南から）



2. 安威城跡 2021-2
B区北壁断面（南から）



3. 包蔵地外
調査区南壁断面（北から）

報告書抄録

ふりがな	れいわよねんどいぼらきしまいぞうふんかざいはくつちようさがいほう—れいわよねんどこっこほじよじぎょう—
書名	令和4年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—令和4年度国庫補助事業—
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第87集
編著者	木村健明、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、正岡大実、宮西貴史
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号
発行年月日	令和6年(2024年)3月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
茨木遺跡2021-9	上泉町	34° 49' 24"	135° 34' 22"	20220307	5㎡	個人住宅 建築工事
茨木遺跡2022-1	片桐町	34° 49' 16"	135° 34' 18"	20220411	5㎡	
茨木遺跡2022-2	片桐町	34° 49' 16"	135° 34' 17"	20220902	1.69㎡	
茨木遺跡2022-3	新庄町	34° 48' 49"	135° 34' 20"	20221018	6.25㎡	
茨木遺跡2022-4	上泉町	34° 49' 22"	135° 34' 20"	20221216	5㎡	
茨木遺跡2022-5	片桐町	34° 49' 16"	135° 34' 18"	20230220	6㎡	
春日遺跡2021-5	春日三丁目	34° 49' 17"	135° 33' 57"	20220106	6㎡	兼用住宅 建築工事
中穂積遺跡2022-1	中穂積一丁目	34° 49' 02"	135° 33' 26"	20220405	6㎡	個人住宅 建築工事
郡遺跡2022-1	上穂積二丁目	34° 49' 25"	135° 33' 32"	20220628	6㎡	
牟礼遺跡2021-2	園田町	34° 48' 52"	135° 34' 54"	20220111	3.6㎡	
溝咋遺跡2022-1	五十鈴町	34° 48' 54"	135° 35' 19"	20220822	6㎡	
溝咋遺跡2022-2	五十鈴町	34° 48' 51"	135° 35' 16"	20230302	6㎡	
中条小学校遺跡2022-1	駅前三丁目	34° 48' 57"	135° 34' 04"	20221207 ～ 20230208	510㎡	兼用住宅 建築工事
中条小学校遺跡2022-2	新中条町	34° 48' 32"	135° 33' 54"	20220414	6㎡	個人住宅 建築工事
中条小学校遺跡2022-3	下中条町	34° 48' 50"	135° 33' 58"	20220421	6㎡	
東奈良遺跡2022-2	東奈良二丁目	34° 48' 21"	135° 34' 08"	20221215	9㎡	
沢良宜城跡2021-2	美沢町	34° 47' 50"	135° 34' 04"	20220317 ～ 20220318	10㎡	
西方浄土寺跡2022-1	真砂一丁目	34° 47' 54"	135° 34' 35"	20220815	6㎡	
常楽寺跡2022-1	蔵垣内三丁目	34° 47' 32"	135° 33' 25"	20220805	6㎡	
安威城跡2021-2	安威二丁目	34° 50' 56"	135° 34' 00"	20220131 ～ 20220201	10㎡	
包蔵地外	玉櫛二丁目	34° 48' 05"	135° 34' 35"	20221011	6㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
茨木遺跡2021-9	集落跡	中世	溝	土師器、瓦器	
茨木遺跡2022-1			—	—	
茨木遺跡2022-2			—	弥生土器	
茨木遺跡2022-3			—	—	
茨木遺跡2022-4			—	—	
茨木遺跡2022-5			溝	土師器、瓦器	
春日遺跡2021-5	集落跡	古墳	溝、土坑	土師器、須恵器、瓦器	
中穂積遺跡2022-1	集落跡	奈良・平安・中世・近世	ピット	土師器	
郡遺跡2022-1	集落跡	弥生・古墳	ピット	弥生土器、土師器	
牟礼遺跡2021-2	集落跡	縄文	—	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器	
溝咋遺跡2022-1	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安	—	土師器、須恵器、瓦器	
溝咋遺跡2022-2			—	土師器、瓦器	
中条小学校遺跡2022-1	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	井戸、溝、土坑、ピット	弥生土器、土師器	
中条小学校遺跡2022-2			—	—	
中条小学校遺跡2022-3			溝、ピット	土師器、瓦、陶磁器	
東奈良遺跡2022-2	集落跡	弥生・古墳	—	土師器、須恵器	
沢良宜城跡2021-2	城館跡	中世	—	—	
西方浄土寺跡2022-1	社寺跡	奈良・平安・中世	—	土師器	
常楽寺跡2022-1	社寺跡	奈良	—	磁器	
安威城跡2021-2	城館跡・集落跡	古墳・平安・中世	—	土師器、須恵器	
包蔵地外	—	—	—	—	

茨木市文化財資料集 第87集

令和4年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

— 令和4年度国庫補助事業 —

発行日 令和6年(2024年)3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷 丸山印刷株式会社

